

クリシュナに辿りつく道



尊師

A.C. バクティヴェーダンタ・スワミ・プラブパーダ
クリシュナ意識国際協会創設者・アーチャーリヤ

クリシュナに辿りつく道

尊 師

A.C.バクティヴェーダンタ・スワミ・プラブパーダ
クリシュナ意識国際協会創設者・アーチャーリヤ

シュリー・グルとゴウラーンガにすべての栄光あれ

目 次

1. 幸せに向かう高速道路 ページ
2. 唱える方法とクリシュナを知る方法 ページ
3. いつでも、どこにでもクリシュナを見る ページ
4. 愚者が歩く道、賢者が歩く道 ページ
5. 至高者を目指して ページ

第1章 幸福への高速道路

幸せになりたい——だれもがそう願っています。ところが、その幸せをつかむ方法を知っている人はほとんどいません。「こうすれば幸せになれる」という謳い文句や情報は巷に氾濫していますが、じっさいに幸せな人がはたしてどれほどいることか。つかのまの喜びや楽しみをほんとうの幸福と思いきこむ人、人、人……。

しかし、幸せになれる道は確かにあります。それが、主クリシュナがアルジュナに説いた『バガヴァッド・ギーター』の教えであり、万人にしめされた幸福への道です。

幸福はいろいろな「感覚」をとおして感じるものです。石には命も感覚もありませんから、幸せも苦しみも感じないはずです。感覚を持つ生き物にしても、それぞれ感じ方は異なります。高い意識を持つ生き物は、そうでない生き物よりも幸せや苦しみを強く感じます。木にも意識はありますが、発達していないため、春夏秋冬おなじ場所に長い年月立ちつづけても、つらいとは感じません。もしも、人がおなじように3日間、いいえ、もっと短い時間でもじっと立っているように言われたら、きっと耐えられないことでしょう。このように、どんな生き物でも意識の高さに応じて幸福や苦痛を感じている——という結論が引きだせます。

物質世界で私たちが味わっている幸せは、じつはほんとうの幸せではありません。木が話せると仮定し、「あなたは幸せですか？」ときいてみてください。おそらく答えることでしょう、「はい、幸せです。一年中ここに立って、風や雪を大いに楽しんでます」と。しかし、木には「楽しい」かもしれませんが、人間が楽しめる環境ではありません。さまざまな生き物がいますから、幸福についてどう考え、どう感じるかも千差万別です。屠殺場の動物は、仲間が目の前で殺されているのを見ても平気で草を食べつづけます。次は自分の番だということがわからないからです。「幸せだなあ」と感じている次の瞬間、自分が殺される——。

このように、幸福感にはいろいろな段階があります。では、「無上の幸福」があるとしたら、それはどのような心境でしょうか？ シュリー・クリシュナがアルジュナに説明します。

スカハンム アーティヤンティカンム ヤトウ タドウ
sukham ātyantikam yat tad

ブッディ・グラーヒヤンム アティーンドウリヤンム
buddhi-grāhyam atīndriyam

ヴェーッティ ヤトウラ ナ チャイヴァーヤンム
vetti yatra na caivāyam

スティタシュ チャラティ タットウヴァタハ
sthitaś calati tattvataḥ

「その喜びあふれた心境（サマーディ）にいる人物は、尽きることのない崇高な幸福感

に満たされ、超越的な感覚を味わいながら歓喜に包まれる。ひとたびこの心境に入れば、決して真理から離れることはない」（『バガヴァッド・ギター』第6章・第21節）

この節にある *buddhi* (ブッディ) というサンスクリット語は、「知識」という意味です。楽しむには知性が必要です。動物には高い知性がありませんから、人間ほどの楽しみを味わうことはできません。死体にも手や鼻や目などの感覚器官が付いていますが、死人はもちろんその感覚は楽しめません。なぜ？ 楽しむ力の源、つまり精神的火花（命）が体から離れたからです。肉体そのものに楽しむ力はありません。死んでしまったその肉体についてよく考えてみてください。感覚を楽しんでいたのは肉体ではなく、その中にいた命（魂）だったはず。「私は自分の体の感覚器官を使って楽しんでいる」——確かにそのとおりです。しかし、じつはほんとうに楽しんでいるのは体の中の魂・精神的な火花なのです。その火花はいつでも楽しむ力を持っていますが、肉体に包まれていればその力は隠されたままです。この精神的な魂が体内にいないければ、その存在を知らないとしても、肉体そのものが楽しみを味わうことはできません。

「美女を差しあげましょう。死んでおりますが」——と言われて、受けとりますか？ もちろん断わるでしょう？ 精神的火花がその体から出ていったからです。その火花（魂）は体内で楽しみ、またその体を維持していました。その火花が出ていけば、体は朽ち果てるだけなのです。

魂が楽しむ——つまり、魂にも感覚があるということです。でなければ魂は楽しめないはず。ヴェーダ文献は精神魂の寸法を原子ほどの大きさであると説明していますが、その魂こそが楽しんでいる中核的存在です。魂の寸法を測ることはできませんが、測れないから大きさは無い、とは言えません。小さな点ほどの物体でも、顕微鏡で見れば長さも幅もあることがわかります。おなじように、魂にも寸法があるのですが、私たちの目には見えません。体格に合わせて服を買うように、精神的火花である魂にも体があるからこそ、物質の体はその体を包むように成長します。魂に姿や形がないのではなく、姿を持つ人物である、ということです。神も姿のある人物であり、精神的火花である魂も神の部分的存在ですから、やはり人物です。父親が個性を持つ人物なら、とうぜん、子どももおなじ存在のはずです。逆に言えば、子どもが個性を持つ人物なら、父親もおなじ存在のはずです。ならば、神の子どもである私たちが「人物で個性を持っている」存在だと断言できるのに、父親である至高主の人格や個性を否定できますか？

Atīndriyam (アティーンドゥリヤム) には、「ほんとうの幸せを得るには、肉体の感覚の誘惑に勝たなくてはならない」という意味が含まれています。*Ramante yogino 'nante satyānanda-cid-ātmani* (ラマンテー ヨーギーノ ナンテー サテャーナンダ・チドゥ・アートウマニ)。精神生活を追求しているヨーギーも、心の内の超靈魂を完璧に瞑想して幸福感を味わっています。歓喜を味わえなければ、感覚を抑えるというやっかいな努力になんの意義があるでしょう。では、完璧な境地をめざして心血を注ぐヨーギーは、どのような喜びを味わっているのでしょうか？ *Ananta* (アナンタ) —— 終わりのない喜びです。終わりが無い？ 私

たち精神魂は永遠で、至高主も永遠です。ですから、私たちが至高主と交わす愛情も永遠です。賢明な人なら、体の諸感覚を満たして得られる不安定な楽しみを捨て、精神生活の楽しみを味わおうとします。至高主と精神生活を分かちあうこと、それが *rāsa-līlā* (ラーサー・リーラー) です。

クリシュナがヴリンダーヴァンの牛飼いの乙女たちと踊ったラーサ・ダンスの話は、さまざまな形でよく取りあげられていますが、往々にしてその内容は歪曲されています。肉体の次元でおこなわれたのではなく、精神的な体をとおしておこなわれた愛情の交換なのです。この事実を正しく理解するには、健全な知性が必要です。ほんとうの幸せを知らない愚かな人は、肉体をとおして得られる幸福を求めようとするからです。

インドにはサトウキビにまつわる話があります。

ある人がサトウキビのことを初めてきき、「噛むと甘いもの」と教わりました。どんな形をしているのか、聞くと「見た目には竹とおなじ」という答。それをきいて、あまり賢くなかったその人は、竹の棒を手当たりしだいに噛んでサトウキビを探そうとしました。

そんな調子でサトウキビの甘さが味わえるのでしょうか。私たちが幸福や喜びを求めている行為も、じつはこのたぐいの、「物質の体を噛んで味わおうとする行為」とおなじです。だから幸福も喜びも味わえないのです。しばらくは喜びを感じるかもしれませんが、ほんとうの喜びとは言えません。刹那的な喜びですから。それは稲妻とおなじで、一瞬だけ空に現われるその光は別の源から出ています。ほんとうの幸せを知らないために、まちがった幸せを求めてしまうのです。

私たちが真の幸福に導いてくれるのがクリシュナ意識です。クリシュナ意識を学べば正しい知性がしだいに高められ、同時に精神的に高められ、崇高な幸福感が味わえるようになります。その幸せが味わえるようになれば、物質的な幸せに対する関心は消えていきます。そして絶対的真理について理解が深まれば、夢まぼろしの幸せには目もくれなくなります。そのクリシュナ意識の境地に入ったとき、どんな結果が待っているのでしょうか。

ヤンム ラブドゥヴァー チャーパラム ラーバハム
yaṁ labdhvā cāparam lābham

マニャター ナーディカンム タタハ
manyate nādhikam tataḥ

ヤスミン スティトー ナ ドウフケヘーナ
yasmin sthito na duḥkhena

グルナーピ ヴィチャーリャター
guruṅāpi vicālyate

「この境地をつかんだ人物は、これ以上得るものはなにもないと考えるようになる。そしてその人物の心は、最大の困難に直面しても決して揺らぐことはない」(『バガヴァッド・ギーター』第6章・第22節)

この境地に入った人は、何を手にいれてもつまらないものと感じるようになります。多

くの人々が、財産、女性、名声、美、知識など、さまざまな富を手に入れようとしていますが、クリシュナ意識を得た人は、「この境地に優る成功はどこにもない」と考えるようになります。クリシュナ意識にはこれほどすばらしい力があり、その甘露を少しでも味わう人は最大の危険から守られます。クリシュナ意識の満足感を味わうにつれ、それ以外の喜びや成功が空しいものに見えてきます。そして、クリシュナ意識になって揺ぎない心を得れば、どのような危険な目にあってもうろたえることはありません。物質界は危険なところですから、だれでも多くの危険にさらされます。しかし、ほとんどの人が危険には目をつぶろうとするし、愚かさゆえにその危険に慣れようとし、人生に多くの危険が立ちまわっているにもかかわらず、クリシュナ意識になる努力をし、ほんとうのふるさと・神の元に帰る準備をしていれば、どんな危険にもたじろぐことはありません。危険は現われては消えていくものだ。なるようになる——そのような心構えになります。物質的な人や、いつかは朽ち果てる体を自分だと思っている人は、このような心境にはなかなかないものです。しかし、クリシュナ意識を高めれば、肉体観念と物質的な束縛から解放されていきます。

経典『シュリーマド・バーガヴァタム』は、物質界を「広大な海」と表現しています。物質宇宙には無数の星が漂っていますから、どれほど多くの「太平洋や大西洋」が存在しているかはかんたんに想像できます。まさに、物質宇宙は膨大な苦悩の海、誕生と死の海でもあります。この無知の大海を渡りきるためには頑丈な船が必要であり、その船がクリシュナの蓮華の御足とされています。すぐにその船に乗ってください。クリシュナの足は小さい、と考へて、乗ることをためらってはなりません。全宇宙は主の足の上で支えられています。主の御足に身をゆだねた人にとって、物質宇宙は子牛の足あとほどの大きさにすぎません。そんな小さな穴にたまった水たまりなど、苦もなく飛びこせます。

タン ヴィヂャードウ ドウフカハ・サンムヨーガ・
taṁ vidyād duḥkha-saṁyoga-

ヴィヨーガン ヨーガ・サンギタン
viyogam yoga-saṁjñitam

「これこそ、物質とかかわることで生じるあらゆる苦しみからの自由である」(『バガヴァッド・ギーター』第6章・第23節)

私たちが物質界に縛りつけられる原因は、感覚が抑えられないことにあります。ヨーガはそのような感覚を抑えるためにあります。感覚が抑制できれば、ほんとうの精神的幸福に目を向けるようになり、やがて人生を完成に導くことができます。

サ ニシュチャイエーナ ヨークタヴヨー
sa niścayena yuktavyo

ヨーゴー アニルヴィンナ・チェータサー
yogo 'nirviṇṇa-cetasā

サンカルパ・プラバハヴァーン カーマーンムス
saṅkalpa-prabhavān kāmāṁs

テヤクトゥヴァー サルヴァーン アシェーシャタハ
tyaktvā sarvān aśeṣataḥ

マナサイヴェンドウリヤ・グラーマンム
manasaivendriya-grāmam

ヴィニヤミヤ サマンタタハ
vinīyamya samantataḥ

シャナイヒ シャナイル ウパラメドゥ
śanaiḥ śanair uparamed

ブッヂャー ドウリティ・グリヒータヤー
buddhyā dhṛti-grhītayā

アートウマ・サンムスタハンム マナハ クリトウヴァー
ātma-saṁstham manaḥ kṛtvā

ナ キンチドゥ アピ テンタイエートウ
na kiñcid api cintayet

ヤトー ヤトー ニシュチャラティ
yato yato niścalati

マナシュ チャンチャランム アステイランム
manaś cañcalam asthiram

タタス タトー ニヤミヤイタドゥ
tatas tato niyamyaitad

アートウマニ エーヴァ ヴァシャンム ナイエートウ
ātmany eva vaśam nayet

「強い決意と信念でヨーガを修練しなくてはならない。まちがった自我から生まれる物欲をすべて捨て、感覚をすべて心で抑制しなくてはならない。一步一步確実に進み、揺らぐことのない確信を持ち、知性を働かせて法悦境に身を置き、心を自己だけに集中させ、ほかの物事は一切考えてはならない。本来不安定で揺れ動く傾向を持つ心が何を思い、どこに行こうとしても、それを引きとめて自己の支配下に置かなくてはならない」(『バガヴァッド・ギーター』第6章・第24-26節)

心はいつも混乱し、なにかを考えていても、不意に別のことを考えはじめます。ヨーガを実践する人は、心を強引にでもクリシュナ意識に結びつけなくてはなりません。心はクリシュナ意識から離れて、外界にある無数の対象物を求めようとします。それが昔からつづけてきた私たちの生き方だからです。これが災いして、心をクリシュナ意識に集中しようとしても最初のうちはてこずるのですが、やがてできるようになります。

考えがあれこれ定まらないのは、心が乱れてクリシュナに集中できていないからです。たとえば、なにか仕事をしているときに、10年、20年、30年、いや40年も前のことが、だしぬけに心に浮かぶことがあります。これは潜在意識から現われるのであり、それがいつも出てくるために心がかき乱されます。水溜りや池をかきまぜると、底にたまっていた泥が水面に上がってきます。おなじように、心が乱れると、長年封じられていた潜在意識が表面に出てきます。かきまわさなければ泥は底に沈んだままです。このヨーガは、心を

静めてさまざまな思いを落ち着かせるためにあります。それを可能にするために、心をかき乱さないようにする数多くの規則や原則が用意されています。その決まりに従えばやがて心を支配できるようになります。禁じられていること、許されていることがたくさんありますが、真剣に心を訓練させるにはどうしても従わなくてはなりません。気まぐれな生き方をしている人に、心は支配できません。クリシュナだけを考える境地になったときに平和で穏やかな心境が待っています。

ブラシャーンタ・マナサンム ヒ エーナンム
praśānta-manasaṁ hy enaṁ

ヨーギナンム スカハンム ウッタマンム
yoginaṁ sukham uttamam

ウパイティ シャーンタ・ラジャサンム
upaiti śānta-rajasaṁ

ブラフマ・ブフータンム アカルマサンム
brahma-bhūtam akalmaṣam

「心をわたしに集中させているヨーギーは、まちがいなく、この上ない幸福を得る。ブラフマンを悟ったその人物は自由な境地にいる。心は穏やかで、情欲は静まり、罪を犯すこともない」（『バガヴァッド・ギーター』第6章・第27節）

心は、勝手な想像をして幸せになろうとします。「こうすれば、ああすれば幸せになれる。そこに幸せがある。あそこに幸せがある」と考えるのです。こうして、心は私たちをいたるところに連れまわします。たとえるなら、手綱（たづな）を付けていない馬が牽（ひ）く馬車に乗っている状態です。行く先を決めるすべもなく、ただ恐怖に震えながら行き先を見つめている。しかし、心がクリシュナ意識の方法に従うようになれば、特にハレー クリシュナ ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ ハレー ハレー／ハレー ラーマ ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ ハレー ハレーを唱えれば、心という荒れ狂う馬を操れるようになります。毎日毎瞬間をクリシュナへの奉仕に使うのです。それができれば、幸福を求めてはかない物質界をさまよわせる「不安定で荒れ狂う心」を抑えられるようになります。

ユンジャン エーヴァンム サダートウマーナンム
yuñjann evaṁ sadātmānaṁ

ヨーギー ヴィガタ・カルマシャハ
yogī vigata-kalmaṣaḥ

スケー ナ ブラフマ・サンムスパルシャンム
sukhe na brahma-saṁsparśam

アチャンタンム スカンム アシュヌテー
atyantaṁ sukham aśnute

「自己に集中し、物質的なけがれを捨てさったヨーギーは、至高の意識と結ばれて至上の幸福を達成する」（『バガヴァッド・ギーター』第6章・第28節）

主クリシュナは、主に身をゆだねた人々を助けてくれます。窮地に追いこまれた人は、助けてくれる人にすぎるものです。『バガヴァッド・ギーター』で言われているように、クリシュナは全生命体の真の友ですから、私たちは主との友好関係をよみがえらせなくてはなりません。友好関係を取りもどす方法がクリシュナ意識なのです。クリシュナ意識を実践すれば、物欲を満たそうとする望みは消えていきます。物質への渴望が私たちをクリシュナから遠ざけてきたのです。クリシュナは私たちの内に住み、私たちがクリシュナに顔を向けることを待ちつづけています。しかし、私たちは物質的な望みという木の実を夢中になって食べています。木の実を食べる激情を抑え、ブラフマン、すなわち純粋な魂という私たち本来の状態にしっかりと立たなくてはなりません。

第 2 章 唱名の方法とクリシュナを知ること

ハレー クリシュナ ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ ハレー ハレー／ハレー
ラーマ ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ ハレー ハレー。この神聖なひびきを持つことばには精神的力がこめられています。このマントラは、心の鏡に積もった埃（ほこり）を洗いながしてくれます。物質的な心をたとえるなら、あまりの車の多さで埃や煤（すす）だらけになったここニューヨークの二番街です。物質的なことをしてきた結果、もともと純粋なはずの心の鏡に大量の埃が積もり、そのために物事を正しく映してくれません。この超越的な音響・ハレー・クリシュナ・マントラは積もった埃を拭きとり、自分本来の状態をはっきり映してくれます。「私は体ではなく、精神魂であり、その兆候は意識である」と悟れば、ほんとうの幸せが実感できます。ハレー・クリシュナを正しく唱えて心が純粋になれば、物質的なけがれはすべて消えていきます。俗界には苦しみの炎が燃えつづけ、だれもがその炎を必死に消そうとしていますが、自分本来の状態、すなわち精神生活に戻らなければその炎を消すことはできません。

主クリシュナが物質界に降誕する理由の一つは、ダルマ（*dharma*）を確立させ、物質存在という炎を消すことで物質界に住む全生命体を救うためにことにあります。

ヤダー ヤダー ヒ ダハルマツシャ
yadā yadā hi dharmasya

グラニル バハヴァティ バハラタ
glānir bhavati bhārata

アピユッタハーナム アダハルマツシャ
abhyutthānam adharmasya

タダートウマーナム スリジャーミヤハンム
tadātmānam srijāmy aham

パリトウラーナーヤ サドゥーナーナム
paritrāṇāya sādūnām

ヴィナーシャーヤ チャ ドウシュクリターンム
vināsāya ca duṣkṛtām

ダハルマ・サンムスタハーパナールタハーヤ
dharma-saṁsthāpanārthāya

サンバハヴァーミ ユゲー ユゲー
sambhavāmi yuge yuge

「バラタの末裔よ。わたしは、宗教活動が衰退するとき、また無宗教が台頭するとき、いつでもどこでも降誕する。敬虔な人々を救い、邪悪な人間たちを抹殺するために、また宗教原則を再確立させるために、わたしは各時代をとおして自ら降誕する」（『バガヴァッド・ギーター』第4章・第7－8節）

この節で使われている *dharma* (ダルマ) にはさまざまな英語訳が当てられています。時には「信念」と訳されますが、ヴェーダ辞典を調べると、別の意味が含まれていることがわかります。信念は変わることがありますが、ダルマは変わりません。水はつねに液体です。液体からなにかに変わったとしたら——たとえば、水が固体になったら——それは水本来の状態ではなく、特定の条件下だけで存在するものに変化しています。ヴェーダ経典が説いているように、私たちのあるべき姿は「至高者の部分体」です。ですから、全体者である至高者に意識を結びつけ、そして身をゆだねることが私たちの本来の姿・ダルマといえます。

私たちは、至高の完全体である神に崇高な奉仕をする立場にあるのに、物質とかかわっているためにその立場を忘れています。仕えること——それが私たち本来の立場です。だれもが召使いであり、主人ではありません。だれでもだれかに仕えています。総理大臣は国の最高人物ですが、同時に国民に仕えています。ところが国民は、その人物の奉仕が気に入らなければ見切りをつけます。「もうあなたは必要ない」と。「私は、自分の目に見える物すべての主人である」と考えるのは、幻想・マヤーです。そのため、物質的な人がする奉仕は、さまざまな名称のもとで間違った方向に向かっています。このような名称と自分を切りはなし、心の鏡から埃を取りのぞけば、「私はクリシュナの永遠の召使いである」という自分本来の立場が正しく見つめられるようになります。

物質界での奉仕と精神界での奉仕をおなじ次元で考えてはなりません。「解放されても召使いのままでいなくてはならないのか」と考えて、思わずぞっとしてしまう人がいるかもしれませぬ。なぜか？ それは、召使いは虐げられるもの、という不愉快な思いをこの世界で経験しているからです。しかし、超越的な奉仕は違います。精神界では、主人も召使いも違いがありません。こちらの世界ではもちろん違っていますが、絶対的な世界ではすべてひとつです。たとえば『バガヴァッド・ギーター』の中で、クリシュナはアルジュナの召使いとしてアルジュナの馬車の御者になっています。アルジュナはクリシュナの召使いですが、ときにはクリシュナが召使いの召使いになることがあります。ですから、精神的な物事を理解するのに物質的な考えで判断してはなりません。物質的な体験はすべて、精神生活の物事が歪んで現われたものです。

私たち本来の立場であるダルマが物質のけがれのために墮落したとき、主が自ら降誕したり身近な召使いを送ったりすることがあります。イエスキリストは自らを「神の子」と呼んでいるように、至高者の代表者でもあります。またモハメッドも自分を至高者の召使いと呼んでいます。このように、私たち本来の立場に矛盾が生じたときには、至高主が自ら現われたり召使いを送ったりして、生命体が本来どうあるべきかを説きます。

ですから、ダルマのことを「作られた信念」と考えてはいけません。正しい意味では、ダルマと生命体は切り離せないものです。いわば、甘いものは砂糖、塩辛いものは塩、また固いものは石であるという条件とおなじです。それはどんな状況でも私たちと切りはなすことはできません。生命体のダルマは「仕えること」にあり、それは、だれでも自分や他人のために仕える気質をそなえていることを見れば、すぐにわかります。どうやってクリシュナに仕えるか、どうやって俗な奉仕とのかかわりから離れるか、どうやってクリシュナ意識に到達するか、そしてどうやって俗な肩書きから解放されるかが、シュリー・クリシュナによって『バガヴァッド・ギーター』で科学的に説明されています。

Sādhu (サードゥ) ということばが上記の節で使われています。*Paritrāṇāya sādḥūnām* (パリトウラーナーヤ サードゥーナーンム) は、神聖で高尚な人物を指しています。聖者は忍耐強く、だれも敵と思わず、心はいつも穏やかです。神聖な人物を指す気質には 26 あり、『バガヴァッド・ギーター』でシュリー・クリシュナが次のように説明しています。

アピ チェートウ スドゥラーチャーロー
apī cet su-durācāro

バジャテー マーンム アナニヤ・バハーク
bhajate mām ananya-bhāk

サードウル エーヴァ サ マンタヴァハ
sādhur eva sa mantavyah

サミヤグ ヴャヴァシトー ヒ サハ
samyag vyavasito hi saḥ

「もっとも忌まわしいことをしても、献愛奉仕をしている人物であれば神聖な気質を持っている。正しい境地にいるからである」(『バガヴァッド・ギーター』第9章・第30節)

一般社会でも言えることですが、ある人には道徳的だと思えても別の人には不道徳的と思えなかったり、逆に不道徳的なことが道徳的に思われたりすることがあります。ヒンドゥー教は飲酒を不道徳とするいっぽう、西洋では飲酒は不道徳どころか常識です。このように道徳の基準は、時代・場所・状況・社会的立場で変わります。それでも、道徳や不道徳の観念がどの社会にもあることに変わりありません。この節でクリシュナは、不道徳なことをしても、それが完全にクリシュナ意識の行動であれば、その人はサードゥ (*sādhu*)・聖者であると言っています。ことばを変えると、不道徳な習慣の中で生きてきたとしても、完全なクリシュナ意識で生きるようになれば、そのような習慣はそれほど重

大な問題ではなくなるということです。どんな場合でも、クリシュナ意識になりさえすればやがて清い心になり、やがてはサードウになります。クリシュナ意識を高めれば、悪い習慣をやめるようになり、神聖な境地に到達するということです。

このことに関連して、ある泥棒の話があります。この男はほかの人たちに混じって聖地を巡礼し、旅の途中で宿屋に泊まりました。いつもの盗み癖で、1人の巡礼者の荷物を盗もうとしました。それでもふっと考えなおしました。「俺はいま巡礼の途中だ。これを盗むのは巡礼中にすべきことじゃない。今日はやめておこう」。ところが、身にしみついた習慣はおそろしいもので、どうしても手が勝手に荷物を盗もうとするのです。ということで、だれかの荷物を盗んだかと思うと、それを別の場所に置き、また別の荷物をつかむとそれを別の場所に置く、といったことを繰り返しました。そんな調子で一晩中荷物を動かしたり置いたりしていたのですが、良心がとがめるものですから、結局1個も盗みませんでした。朝になって巡礼者たちが目を覚まします。やがてそれぞれ自分の荷物が無いのに気づき、あたりを探すのですが、どうしても見つかりません。やがて巡礼者の間でけんかが始まって大騒ぎになりましたが、そうこうしているうち、まったく別の場所でそれぞれ荷物が見つかりました。無事にすべてもどったとき、張本人の泥棒が説明をはじめました。「みなさん、私は盗みを仕事にしている者です。夜になって盗み癖がでて、みなさんの荷物に手を出したくなりました。しかし、いくらなんでも聖地では、と考えると思いとどまりました。それでも手が勝手に動いて、皆さんの荷物の場所をあちらこちらと変えてしまったのです。どうかお許してください」。これが悪い習慣の特徴です。もう泥棒はしたくないと考えても、癖になっているのでどうしてもやってしまう。そのためクリシュナは、クリシュナ意識を高めるためにこのような不道德な習慣を捨てる決心をした人はサードウである、と言っています。過去の悪癖のためになにかのはずみで過ちを繰り返したとしても。次の節でシュリー・クリシュナが言います。

クシブランム バハヴァティ ダハルマートウマー
kṣīpraṁ bhavati dharmātmā

シャシュヴァッチャーンティンム ニガッチャティ
śāśvac-chāntim nigacchati

カウンテーヤ プラティジャーニーヒ
kaunteya pratijānīhi

ナ メー バハクタ プラナッシャティ
na me bhaktaḥ praṇaśyati

「その人物はすぐに正義の人となり、永遠な平安をつかむ。クンティーの子よ、わたしの献愛者は決して滅びないことを力強く宣言せよ」(『バガヴァッド・ギーター』第9章・第31節)

クリシュナ意識に身をゆだねれば、やがて神聖な氣質をそなえた人間になる、とシュリー・クリシュナがこの節で宣言しています。扇風機のコンセントを抜いても羽根はしばらく

く回りつづけますが、いつか止まることはわかっています。ひとたびクリシュナの蓮華の御足に身をゆだねれば、カルマを引きおこす行動のスイッチを切ることができ、たとえ昔の悪癖がしばらくつづいても、やがてなくなってしまいます。クリシュナ意識に身をゆだねた人はだれでも、善人になるための努力をする必要がないのは事実です。あらゆる良い質が自然に高まってくるのですから。『シュリーマド・バーガヴァタム』でも、クリシュナ意識に到達した人物は良い質すべてを同時に得る、と言われていています。いっぽう、良い質をたくさん持っていたても、神を思う気持ちがまったくなければ、その善人たる質もまったく役に立ちません。なぜ？ 悪癖をやめる可能性がないからです。クリシュナ意識を持たなければ、物質界では必ず悪いことをするはずで。

ジャンマ カルマ チェ メー ディヴァンム
janma karma ca me divyam

エーヴァンム ヨー ヴェーツティ タットウヴァタハ
evam yo vetti tattvataḥ

テヤクトゥヴァー デーハンム プナル ジャンマ
tyaktvā dehaṁ punar janma

ナイティ マーメーティ ソー ルジュナ
naiti mām eti so 'rjuna

「アルジュナよ。わたしの降誕と行動の超越的質を知る者は、肉体を去ったあとに物質界にはもどらず、わたしの永遠なる住居に達する」（『バガヴァッド・ギーター』第4章・第9節）

クリシュナが降誕する使命について、さらに詳しく述べられています。主がある使命のために降誕すれば、主が何をするかも見ることができます。もちろん、神が化身として降誕することを信じない哲学者もいて、「神がこんなに墮落した世界に降りてくるものか」と言います。しかし、『バガヴァッド・ギーター』には別の教えがあります。献愛者は「『バガヴァッド・ギーター』のことはすべて受けいれなくてはならない。そうでなければ読む意味がない」と考えるべきです。『バガヴァッド・ギーター』でクリシュナは、「化身となって使命を果たすために降誕する」と言い、じっさいにその行動もしめています。たとえば、クリシュナはアルジュナのために御者となり、クルクシェートラの戦場でいろいろなことをしました。戦争では国や人物がどちらかの味方に付きますが、主クリシュナはアルジュナ側に付きました。じっさいはだれにでも公平に行動する方なのですが、一見アルジュナの味方になったように見えます。しかし、この行動をふつうの鼻肩（ひいき）として見てはいけません。この節で主クリシュナが指摘しているのは、主の物質界への降誕は超越的だという点です。Divyam（ディヴァン）は「超越的」という意味です。主の行動に俗な質はまったくありません。今でも、インドでは8月末になると宗派の違いを問わずクリシュナの誕生日を祝います。西洋でイエスキリストの誕生をクリスマスの日に祝うのとおなじです。クリシュナの降誕日をジャンマーシュタミー（Janmāṣṭamī）といい、この節でも「わ

たしの誕生」を *janma* (ジャンマ) ということばで表現しています。「誕生」すれば「行動」するものです。クリシュナの誕生と行動が超越的であるという言い方は、ふつうの誕生や行動と違うことを表わしています。行動が超越的とはどういうことか、と尋ねる人がいるかもしれません。主は誕生し、戦争でアルジュナの側に付き、ヴァスデーヴァという父を持ち、デーヴァキーという母を持ち、また家族も持っている——では、どこが超越的なのでしょう？ クリシュナは言います、*evam yo vetti tattvataḥ* (エーヴァン ヨー ヴェーッティ タットウヴァタハ)。私たちは主の誕生と行動を正しく理解しなくてはなりません。クリシュナの誕生と行動を真に理解すれば、その結果は *tyaktvā dehaṁ punar janma naiti mām eti so 'rjuna* (テヤクトウヴァー デーハン プナル ジャンマ ナイティ マーメーティ ソー アルジュナ) ——現在の物質の体を出たあと、ふたたび生まれることなくクリシュナの元にそのまま帰っていきます。解放された魂になるのです。永遠の精神界に行き、至福と知識と永遠性にあふれた自分本来の境地にもどるということです。これが、クリシュナの誕生と行動の超越的な質を正しく知るだけで達成されるのです。

魂は、ある体を終えると次の体に入ります。自分の行動に応じて一つの肉体(衣服)から別の肉体に変わる生涯を繰り返すのです。これが魂の転生です。今私たちは、肉体をまるで自分自身のように考えていますが、体は衣服とおなじです。ほんとうは、真実の体、すなわち精神的な体を持っています。肉体は、精神的な体と比べれば表面的な覆いにすぎません。体が古くなって使えなくなったら、あるいは事故にあって動かなくなったら、ちようど着古して汚れた衣服を捨てるように別の新しい物質の体を受け入れるのです。

ヴァーサーンシ ジールナーニ ヤタハー ヴィハーヤ
vāsāmsi jīrṇāni yathā vihāya

ナヴァーニ グルフナーティ ナロー パラーニ
navāni gr̥hṇāti naro 'parāni

タタハー シャリーラーニ ヴィハーヤ ジールナーニ
tathā śarīrāṇi vihāya jīrṇāny

アニヤーニ サンムヤーティ ナヴァーニ デーヒー
anyāni samyāti navāni dehī

「古くなった衣服を捨てて新しい衣服を着るように、魂は、使えなくなった古い物質の体を捨てて新しい体をまとう」(『バガヴァッド・ギーター』第2章・第22節)

肉体は、最初に作られたときはエンドウ豆ほどの大きさしかありません。やがて赤ん坊として生まれでて、子どもになり、少年になり、青年になり、成人になり、そして老人へと変化し、やがて最終的に使えなくなったときに、体の中にいた生命体は別の体に移っていきます。ですから、体は絶えず変化しているのであり、死とは、現在の体が最終的に変わる瞬間にすぎません。

デーヒノー アスミン ヤタハー デーヘー
dehino 'smin yathā dehe

カウマーランム ヤウヴァナンム ジャラー
kaumāraṁ yauvanam jāra

タタハー デーハーンタラ・プラープティル
tathā dehāntara-prāptir

ディーラス タトゥラ ナ ムヒヤティ
dhīras tatra na muhyati

「肉体をまとった魂が、肉体の中を、少年期から老年期へと絶えず肉体の中を移動しつづけるように、魂も、死ぬときに別の体に入って行く。自己を悟った魂は、この変化に惑わされない」（『バガヴァッド・ギーター』第2章・第13節）

肉体は変化しても、その中に住む者（魂）はおなじ状態で生きつづけます。少年が青年になっても、肉体の中に住む魂は変わりません。少年期にいた魂がどこか別のところに行ったわけではありません。医学も、肉体が毎瞬間変化していることを認めています。魂がその変化に惑わされていないように、自己を悟った人物は、臨終のときの最後の変化に惑わされません。しかし、物事を正しく理解していない人は悲しみます。魂は、物質的な環境の中でいつも体を変えつづけています。これが私たちの病気です。そして、いつでも人間の体に生まれ変わるわけでもありません。来世で得る体は現世の行動で決定され、動物や半神の体を得たりします。『パドマ・プラーナ』は、肉体の種類には840万種類あると定義しています。死んだ魂はそのひとつに入ります。しかし主クリシュナが約束しています、主の誕生と行動を真に理解した者はこの輪廻の繰りかえしから解放される、と。

どうすればクリシュナの誕生と行動を正しく理解できるのでしょうか。このことが、『バガヴァッド・ギーター』の第18章で説明されています。

バクチャー マーンム アビヒジャーナーティ
bhaktyā māṁ abhijānāti

ヤーヴァーン ヤシュ チャースミ タットウヴァタハ
yāvān yaś cāsmi tattvataḥ

タトー マーンム タットウヴァトー ギャートウヴァー
tato māṁ tattvato jñātvā

ヴィシャテー タドゥ・アナンタランム
viśate tad-anantaram

「最高人格主神は献愛奉仕だけによって理解できる。そのような献愛奉仕をとおして至高主を完璧に意識することができる人物は、神の国に入って行く」（『バガヴァッド・ギーター』第18章・第55節）

この節ではふたたび *tattvataḥ* (タットウヴァタハ) 「真に」ということばが使われています。献愛者になれば真にクリシュナの科学を理解できます。献愛者でなければ、つまりクリシュナ意識を求めて努力する人でなければ理解できません。第4章の始め（第3節）でクリシュナはアルジュナに、「この科学を教えるのは、君がわたしの献愛者で友人であるからだ」と言います。『バガヴァッド・ギーター』を学術的な視野だけから学ぼうとする人にとって、

クリシュナの科学は神秘のベールに包まれています。『バガヴァッド・ギーター』は、書店で買ってひとりで学んでも理解できるものではありません。アルジュナは、偉大な学者でも、ヴェーダを研究するヴェーダーンティストでも、哲学者でも、ブラーフマナでも、また放棄階級の間人でもありませんでした。家族を持つ軍人でした。それでも、クリシュナはアルジュナを『バガヴァッド・ギーター』を授ける相手として、また師弟継承の最初の間人に選びました。なぜでしょうか。「なぜなら君はわたしの献愛者だから」。これが『バガヴァッド・ギーター』やクリシュナをありのままに理解する資格です——クリシュナ意識にならなくてはならない、ということです。

では、クリシュナ意識とは？ それは、ハレー クリシュナ ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ ハレー ハレー／ハレー ラーマ ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ ハレー ハレーの唱名をとおして心の鏡に積もった埃(ほこり)を取りのぞく方法です。このマントラを唱え、『バガヴァッド・ギーター』を学ぶことで、少しずつ着実にクリシュナ意識に高められていきます。Īśvaraḥ sarva-bhūtānām (イーシュヴァアラハ サルヴァ・ブフターナーナム) ——クリシュナはいつも私たちの心の中にいます。個々の魂と至高の魂は、肉体という木にいつしよに住んでいます。個々の魂(ジーヴァ・jīva)は、その木の実を食べていますが、超靈魂(パラマトマー・Paramātmā)はその様子を黙って見えています。個々の魂が献愛奉仕を始め、少しずつクリシュナ意識を高めると、心の中に住んでいる超靈魂は、心の鏡に積もっているあらゆる埃を取りのぞくことができる力を貸してくれます。クリシュナは神聖な人すべての友であり、クリシュナ意識になろうとする努力も神聖です。Śravaṇam kīrtanam (シュラヴァナン キールタナン) ——唱えることと聞くことでクリシュナの科学が理解でき、その結果クリシュナのことがわかるようになります。クリシュナを理解すれば、死ぬときに精神界・クリシュナの住居に入ります。精神界については『バガヴァッド・ギーター』に述べられています。

ナ タドゥ バハーサヤテー スーリヨー
na tad bhāsayate sūryo

ナ シャシャーンコー ナ パーヴァカハ
na śaśāṅko na pāvakaḥ

ヤドゥ ガトウヴァー ナ ニヴァルタンテー
yad gatvā na nivartante

タドゥ ダハーマ パラマンム ママ
tad dhāma paramam mama

「わたしのその住居は、太陽や月や電気で照らされているのではない。その地に辿りついた者は、物質界には決してもどってこない」(『バガヴァッド・ギーター』第15章・第6節)

物質界はいつも暗闇に包まれています。だから太陽、月、電気の光を必要としています。ヴェーダは私たちに、「いつまでも暗闇の中にはいけない、精神界という光あふれる世

界に入らなくてははいけない」と教えています。暗闇ということばには2つの意味がこめられています。「光のない状態」と「無知」です。

至高主は無数の力をそなえています。主は、物質界でなにかをするために降誕するのではありません。ヴェーダも「至高主にすべきことは何もない」と言っています。『バガヴァッド・ギーター』でシュリー・クリシュナも言いました。

ナ　メー　パールタハースティ　カルタヴァンム
na me pārthāsti kartavyam

トウリシュ　ローケーシュ　キンチャナ
triṣu lokeṣu kiñcana

ナーナヴァーブタンム　アヴァーブタヴァンム
nānavāptam avāptavyam

ヴァルタ　エーヴァ　チャ　カルマニ
varta eva ca karmaṇi

「プリターの子よ。三天体系の中でわたしに課せられた活動は何もない。また、なにかに不足していることも、なにかを得なくてはならないということもない——それでも、わたしは活動をしている」（『バガヴァッド・ギーター』第3章・第22節）

クリシュナは、物質界に降りてなにかをする必要があったわけではありません。クリシュナに等しいか、クリシュナを超える者はいません。主はあらゆる知識をそなえた方です。苦行をして知識を授かったわけではありません。どんな時でもどんな状態でも、主は完璧な知識に満たされているのです。アルジュナに『バガヴァッド・ギーター』を語りましたが、だれかにその内容を教わったわけでもありません。クリシュナがそういう方であることを理解した人は、物質界にもどって生と死を繰り返すことはありません。私たちは眩惑されているため、自分たちの生活環境を調節することに一生を費やしていますが、それは人間生活のほんとうの目標からはずれています。私たちの生涯は、クリシュナの科学を理解するために用意されているのです。

物質生活では、食べる問題、性生活の問題、睡眠の問題、身を守る問題などを解決し、感覚を満たす必要があります。それは人間にも動物にも言えることです。動物は、この問題を解決するために忙しく動きまわっていますが、私たちがおなじことをしているのであれば、動物と変わらない生活をしていることになります。人間には崇高なクリシュナ意識に高められる特別の資質がそなわっていますが、それを活用しない人は動物とおなじです。現代文化の欠点は、このような生存競争の問題の解決に重点が置かれすぎていることにあります。私たちは精神的な存在ですから、生と死の束縛から自分を救うことは義務でもありません。そのためにも、人間生活という特別な機会を逃さないよう心がけなくてはなりません。シュリー・クリシュナも『バガヴァッド・ギーター』を教えるために自ら降誕し、私たちが神の意識になれるよう救いの手をさしのべています。まさに、物質創造界はこの教えを利用するために与えられているのです。せつかくこの機会や人間生活という贈り物

を授かったのに、クリシュナ意識を高めるために利用しなければ、めったに得られないチャンスを見逃していることになります。この教えを実践する方法はとてかんたんです。Śravaṇam kīrtanam (シュラヴァナンム キールタナンム) —— 唱えることと聞くことです。聞くことがすべての始まりであり、注意して聞けば悟りは必ずやってきます。クリシュナは私たちのなかにいるのですから、ぜったいに助けてくれます。努力し、わずかな時間を使えばいいのです。自分が高められているかどうか、他人に聞く必要はありません。おのずとわかります。空腹だった人が、食べたあとに満足感を味わうように。

クリシュナ意識の方法、自己を悟る方法はそれほど難しいことはありません。クリシュナはその方法を『バガヴァッド・ギーター』をとおしてアルジュナに伝えましたし、私たちがアルジュナが理解したように理解すれば、難なく完璧な境地に辿りつくことができます。しかし、『バガヴァッド・ギーター』を通俗かつ学術的な見方で曲解しようとするれば、まったくの無駄骨に終わることでしょう。

先に述べたように、ハレー・クリシュナの唱名は、物質的なけがれを心の鏡から取りのぞいてくれる方法です。クリシュナ意識は私たちの内側に眠っているのですから、クリシュナ意識をよみがえらせるのに表面的な助けはいりません。自己そのものがクリシュナ意識なのです。この方法に従って自己を目覚めさせてください。クリシュナ意識は永遠に変わらない真実です。教義ではありませんし、組織に押しつけられてできあがる信念でもありません。人間や動物、すべての生命体の内にあります。主チャイタンニヤ・マハープラブが 500 年ほど前、南インドのジャングルを歩きながらハレー・クリシュナを唱えると、あらゆる動物——虎、象、鹿など——が主といっしょに聖なる名前にあわせて踊りました。もちろん、これは主の唱名の純粋さがあったからこそ可能になったことです。私たちが、唱名の質を高めるにつれ、純粋な境地に入っていくことができます。

第 3 章

どこにでも、いつでもクリシュナを見る

クリシュナは、日々の生活でクリシュナ意識をどのように実践するかについても教えています。仕事をやめたり活動をすべてやめたりする必要はありません。することをクリシュナ意識に合わせてすればいいのです。だれでも職業を持っていますが、では、どのような気持ちで仕事をすればいいのでしょうか。「私は、家族のために働かなくてはならない」とだれでも考えています。社会、政府、家族を満足させなくてはならない——だれもがそのような考えに縛られています。なにかを巧みにこなすには正しい心構えが必要です。気持ちが乱れていたり、心に異常があったりすれば自分の義務は果たせません。義務は正しく実行すべきですが、クリシュナを満足させる気持ちで実行してください。仕事そのものを変えるのではなく、だれのために働くのかを理解するのです。果たすべきことは果たさなくてはなりません。カーマ (kāma) 「欲望」に駆られてやるべきではありません。サ

ンスクリット語の *kāma* (カーマ) は、欲情、欲望、感覚満足を指しています。シュリー・クリシュナは、このカーマ・欲情を満たすために行動してはいけないと教えています。『バガヴァッド・ギーター』のすべての教えはこの原則に基づいています。

アルジュナは、「親族と戦わない」という感情を満たしたかったのですが、クリシュナは、至高主を満足させるために自分の義務を果たすよう確信させました。王国の所有権を捨て、親族を殺さない、という考え方は一般人の目には慎ましく見えますが、クリシュナは認めませんでした。「感覚満足」ゆえの決心だったからです。仕事や義務を変えなくてもいいのです——アルジュナが変えなかったように——意識を変えるのです。しかし、変えるには知識が必要です。その知識は「私はクリシュナの部分体である。それはクリシュナの精神的力である」と知ることであり、それがほんとうの知識です。特定の知識があれば機械を修理できるかもしれませんが、ほんとうの知識とは、「私はクリシュナの精神的なエネルギーを構成する不可欠な部分体」という本来の境地を知ることです。主の部分体なら、私たちが感じる喜びも、主という「全体」に依存しているはずで、たとえば、手は体につながれて体のために使われるときにこそ、喜びを感じることができます。他人の体に使われても喜びは感じません。私たちはクリシュナの部分体ですから、クリシュナに仕えるときにこそ私たちの喜びがあるはずで、ほとんどの人は、「私は人に仕えても幸福になれない、自分に仕えたときだけ幸福になれる」と考えています。しかしその「自分」とはだれかを知りません。クリシュナがその自分です。

ママイヴァーンショー ジーヴァ・ローケー
mamaivāṁśo jīva-loke

ジーヴァ・ブータ サナータナハ
jīva-bhūtaḥ sanātanaḥ

マナ シャシュタハーニンドウリヤーニ
manaḥ śaṣṭhānīndriyāṇi

プラクリティ・スタハーニ カルシャティ
prakṛti sthāni karṣati

「条件づけられたこの世界にいる生命体は、わたしの永遠の部分体である。条件づけられた生活ゆえに、心を含む6種類の感覚との苦闘を強いられている」(『バガヴァッド・ギーター』第15章・第7節)

私たちジーヴァ (*jīva*)・生命体は、物質に囚われているために今は全体者から離れています。ですから、私たちの内に眠っているクリシュナ意識とふたたび結ばれるよう努力をしなくてはなりません。私たちはクリシュナを忘れて自分だけで生きようとする不自然なことをしていますが、これはできることではありません。クリシュナから離れて生きれば、物質自然の法則に縛られるだけです。「私はクリシュナに縛られない」と思う人はクリシュナの幻想エネルギーに縛られます。これは、自分は国や国の規則に縛られないと思えば、警察の力に縛られるのとおなじです。だれもが自由奔放に生きようとしていますが、それ

はマーヤー・幻想です。地域、社会、国家、あるいは世界の中で自分だけ独立した状態はなれません。自分はなにかに依存していることに気づいたとき、知識を得ることができません。今、世界中の人々が平和のために苦闘していますが、その平和原則をどう実行しているのか知りません。国連は平和のために懸命に頑張ってきましたが、戦争は今でもつづいています。

ヤッチャーピ サルヴァ・ブフターナーンム
yac cāpi sarva-bhūtānām-

ビージャンム タドウ アハンム アルジュナ
bījaṁ tad aham arjuna

ナ タドウ アステイ ヴィナー ヤトウ シヤーン
na tad asti vinā yat syān

マヤー ブフターンム チャラーチャランム
mayā bhūtānām carācaram

「アルジュナよ、わたしは全存在物の創造の源である。動く生物、動かない生物すべてが、わたし無くして存在できない」（『バガヴァッド・ギーター』第10章・第39節）

このように、クリシュナは万物の所有者、究極の受益者、すべての結果を受けとる方です。労働の結果を得るのは自分だ、と思うのはまちがっています。何をしてもその結果を享受するのはクリシュナである、という理解に達しなくてはなりません。会社で働く何百人もの従業員は、労働の利益は会社の所有者のものであることを知っています。銀行員が「私は大金を扱っている。これはすべて私のものだから、家に持ち帰っていてもいい」と考えたら、その行員は面倒なことに巻き込まれるはずで、自分で貯めた財産だから感覚満足のために自由に使える、と考えるのは、カーマ (*kāma*)・欲望に動かされて行動しているからです。しかし、すべてはクリシュナの所有物であることを理解する人は解放されます。かせいだお金は自分のもの、と思えばマーヤーに支配されます。すべてはクリシュナのもの、と考える人がほんとうに博識な人なのです。

イーシャヴァーツシャンム イダンム サルヴァンム
īśāvāśyam idaṁ sarvaṁ

ヤトウ キンチャ ジャガテヤーンム ジャガトウ
yat kiñca jagatyām jagat

テーナ テャクテーナ ブンジーター
tena tyaktena bhujīthā

マー グリダハ カッシャ スヴィドゥ ダハナム
mā grīdhāḥ kasya svid dhanam

「宇宙に存在する一切の生物・無生物は、主によって支配され、所有されている。ゆえに、自分に必要なものとして割り当てられたものだけを受けとるべきであり、それ以外は、それがだれのものかをよく承知したうえで、受けとってはならない」（『シュリー・イーシヨーパニシャッド』（マントラ1）

Īśāvāsya (イーシャーヴァーッシャ) の意識——すべてはクリシュナのものという考え方——は、一人ひとりが、そして世界中の人々が思いだすべきものです。それが達成できればほんとうの平和が訪れます。博愛主義や利他主義をかかげて、おなじ国民や家族や世界中の人々と友好関係を築こうとしても、これはまちがった観念に基づいています。ほんとうの友人はクリシュナですから、家族や国や自分が住んでいる星のために役に立ちたいのであれば、クリシュナのために働いてください。家族の幸せを思うなら、かれらをクリシュナ意識の仲間にしようとしてください。家族の幸せのために働く人はたくさんいますが、あいにくその心は満たされていません。どこにほんとうの問題があるかを知らないからです。『シュリーマド・バーガヴァタム』が説くように、自分の子どもを死や物質自然の手から救うことができなければ、父、母、教師になるべきではありません。父親はクリシュナ意識の知識を持つべきであり、自分に託された無垢な子どもを生と死の循環にふたたび転落させないよう決心しなくてはなりません。子どもが生と死という苦しみサイクルに巻きこまれないよう育てる決意をすべきです。しかし、それを実行するには、まず自分が熟達しなくてはなりません。クリシュナ意識に熟達すれば、自分の子どもはもちろん、社会や国も助けられます。でも、自分が無知に縛られていれば、おなじように縛られている他の人たちを自由にさせられますか？ 他人を自由にさせるには、まず自分が自由にならなくてはなりません。しかしじつは、自由な人はだれもいないのです。だれもが物質自然の魔法に縛られているからです。いっぽう、クリシュナに身をゆだねている人ならマーヤーには捕らわれません。ほとんどの人々が縛られているなかで、クリシュナ意識の人物は自由です。太陽の光に包まれていれば暗闇はありません。人工の光に照らされても、その光は不安定で、やがて消えてしまうかもしれない。クリシュナは太陽の光とおなじです。主がいるところには暗闇も無知もありません。賢い人物・マハートマー (mahātmā) がそのことを理解します。

アハナム サルヴァッシャ プラバハヴォー
aham sarvasya prabhavo

マッタ サルヴァナム プラヴァルタター
mattaḥ sarvaṁ pravartate

イティ マトウヴァー バハジャンター マーンム
iti matvā bhajante mām

ブダハー バハーヴァ・サマンヴィターハ
budhā bhāva-samanvitāḥ

「わたしは精神界・物質界両方の源である。すべてはわたしから発生する。このことを知る賢者は、わたしへの献愛奉仕に励み、全霊をこめてわたしを崇拝する」(『バガヴァッド・ギーター』第10章・第8節)

この節には *budha* (ブダハ) ということばが使われていますが、これは賢い人物や博学な人物を指しています。では、その人のきざしは？ クリシュナが万物の源であることを知っ

ている、ということです。見える物すべてがクリシュナから発出されたことを知っているのです。物質界で一番顕著に見られるのが性生活です。どの生き物の中にも性的に惹かれあう傾向が見られますが、いったいそれはどこから来ているのだろう、と尋ねる人もいるでしょう。賢い人は、それがクリシュナの内にもあり、ヴラジャの乙女たちとの間に見られることを知っています。物質界にある物事はなんでもクリシュナの内に完璧な形で存在しています。唯一の違いは、物質界では歪んだ形で現われているという点です。クリシュナの内では、このような傾向や現われが純粋な意識として、精神的な形で現われているのです。このことを完全な知識として知っている人が、クリシュナの純粋な献愛者になります。

マハートゥマーナス トゥ マーンム パールタハ
mahātmānas tu mām pārtha

ダイヴィーンム プラクリティンム アーシュリターハ
daiivīm prakṛtim āśritāḥ

バハジャンティ アナニヤ・マナソー
bhajanty ananya-manaso

ギャートゥヴァー フォーターディンム アヴァヤンム
jñātvā bhūtādim avyayam

サタタンム キールタヤントー マーンム
satataṁ kīrtayanto mām

ヤタンタシュ チャ ドウリダハ・ヴラターハ
yatantaś ca dṛḍha-vratāḥ

ナマシャンタシュ チャ マーン バクテヤー
namasyantaś ca mām bhaktyā

ニテヤ・ユクター ウパーサテー
nitya-yuktā upāsate

「プリターの子よ。惑わされていない者、偉大な魂は神聖な力に守られている。わたしを最高人格主神、根源かつ無尽蔵の存在であることを知っているから、完璧な献愛奉仕をする。その偉大な魂は、いつもわたしの栄光を唱え、強い決意で努力し、わたしにひれ伏しつつ、絶えることなく熱意をこめてわたしを崇拜している」（『バガヴァッド・ギーター』第9章・第13-14節）

だれを偉大な魂・マハートマー（*mahātmā*）と言うのでしょうか。優性の力の影響下にいる人物です。私たちは生命体ですから優性と劣性という力の中間にいます——2つの力のどちらかに自分を位置づけられるということです。クリシュナはまったく自由の身であり、私たちも主の部分ですから、この自由な気質をそなえています。ですから、どちらの力に身を置くか自分で選ぶことができます。しかし優性の力について知らないために、劣性の力に留まるしかありません。

哲学者の中には、「人間が知っている自然界のほかに別の世界はなく、問題を解決する唯

一の法は、それを捨てて無になることだ」と主張する人々がいます。しかし、私たちは生命体ですから無にはなれません。肉体が変われば存在そのものが終わる、というわけではないのです。物質自然の影響から逃れるには、私たちが本来どこにいるべきか、どこへ行くべきかを知らなくてはなりません。行き先を知らなければ、「優性も劣性も私たちにはわからない。わかるのは今の状態だけだから、このまま生きて朽ち果てるしかない」と考えるだけです。しかし『バガヴァッド・ギーター』は優性の力、劣性の自然界について私たちに教えてくれます。

クリシュナが話すことは、すべて永遠な知識です。その中身が変わることはありません。今私たちがどんな仕事をしているか、アルジュナがどのような仕事をしていたかは問題ではありません——意識を変えるだけでいいのです。人々は自分の興味だけに導かれて生きていますが、何が本当の興味なのかを知りません。じつは、自分の興味ではなく感覚の興味に動かされています。何をしても感覚を満たすために行動しているのです。変えるのはこの意識です。その意識に、私たちのほんとうの興味、すなわちクリシュナ意識を植えつけなくてはなりません。

どうすれば、それができるのでしょうか。毎日暮らしていくなかで、どうすればクリシュナ意識をはぐくむことができるのでしょうか。クリシュナはそのかんたんな方法を教えています。

ラソー ハンム アプス カウンテーヤ
raso 'ham apsu kaunteya

ブラバハースミ シャシ・スーリャヨーホ
prabhāsmi śaśi-sūryayoḥ

ブラナヴァハ サルヴァ・ヴェーデーシュ
praṇavaḥ sarva-vedeṣu

シャブダハ ケー パウルシャンム ヌリシュ
śabdaḥ khe pauruṣaṁ nṛṣu

「クンティーの子・アルジュナよ。わたしは水の味、太陽と月の光、ヴェーダ・マントラの音節オーム (om)、空間にある音、人間の能力である」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第8節)

この節でシュリー・クリシュナは、毎日の暮らしをつづけながら完璧にクリシュナ意識になれる方法を教えています。どんな生き物でも水を飲む必要があります。水の味はすばらしく、喉が渇いているときには水でなければその渇きを癒すことはできません。どんな会社にも純粋な水の味は作れません。水がこれほどすばらしいのですから、私たちは水を飲むときにクリシュナ・神を思いだすことができます。毎日の生活に水は欠かせませんから、そのようにして神を意識することができるのです——忘れるわけがありません。

また、光る物もクリシュナです。精神界の光の源・ブラフマジョーティ (brahmajyoti) はクリシュナの体から放たれています。物質界は覆われている世界です。物質宇宙の本来

の姿は暗闇であり、夜がその暗闇の表われです。太陽、月、電気という模造の光で照らされているのがこの物質界です。では、この光はどこから発生しているのでしょうか。太陽はブラフマジョーティ、すなわち精神界のまばゆい光に照らされています。精神界に太陽、月、電気などは要りません。ブラフマジョーティに照らされているからです。しかし、地球にいる私たちでも、太陽から放たれている光を見たらクリシュナを思い出すことができます。

オーム (Om) から始まるヴェーダのマントラを唱えても、クリシュナを思い出すことができます。「オーム」ということばは、「ハレー・クリシュナ」のように、神に対する呼びかけであり、クリシュナを指しています。Śabdaḥ (シャブダ) は「音」の意味で、どんな音を聞いても、それは根源の音、すなわち純粹で精神的な音・オームあるいはハレー・クリシュナであると理解してください。この世界で聞くどんな音も、根源の崇高な音・オームから発生したものです。このように、音を聞いたとき、水を飲んだとき、光を見たときに神を思い出すことができます。これができれば、神を思いださないときはありません。これがクリシュナ意識の方法です。こうすれば、クリシュナを1日24時間思っていられませぬ。もちろんクリシュナはいつも私たちといっしょにいますが、このように思いだせば、主がじっさいに存在することを実感できます。

神と触れあうには9つの方法があり、最初の方法が śravaṇam (シュラヴァナンム) ——聞くことです。『バガヴァッド・ギーター』を読めばシュリー・クリシュナのことばを聞くことができますし、またそれはクリシュナ・神とのじっさいの触れあいにほかなりませぬ。(献愛者が「クリシュナ」と言えば、それは「神」を指しています)。神と交流していれば、またクリシュナということばを聞きつづけていれば、物質自然のけがれが消えていきます。クリシュナを、音、光、水、またその他多くの物事そのものであると理解すれば、クリシュナを避けてとおることはできません。こうして主クリシュナを思い出すことができれば、主との交流も永遠につづくのです。

クリシュナと交流するのは、光に照らされることとおなじです。太陽の光があたるところにけがれはありません。太陽の紫外線に当たっていれば病気にはかかりませぬ。西洋医学では、太陽の光はあらゆる病気の治療に勧められていますし、ヴェーダは、病人が太陽を崇拜して病気を治すよう勧めています。おなじように、クリシュナ意識でクリシュナと触れあえば私たちの不治の病も治ります。ハレー・クリシュナを唱えればクリシュナと交流できますし、水をクリシュナとして見、太陽や月をクリシュナとして見、音の中にクリシュナを聞き、水を飲んでクリシュナを味わうことができます。今私たちはクリシュナを忘れています。しかし今こそ、クリシュナを思いだして精神生活をよみがえらせなくてはなりません。

この śravaṇam kīrtanam (シュラヴァナン キールタナン) ——聞いて、唱えること——は、主チャイタンニヤ・マハープラブが認めている方法です。主チャイタンニヤは、友人で偉大な献愛者であるラーマーナンダ・ラーヤと話したとき、精神的な悟りを得る方法につい

て尋ねました。ラーマーナンダは、*varṇāśrama-dharma* (ヴァルナーシュラマ・ダルマ)、*sannyāsa* (サンニャーサ)・活動の放棄、またその他多くの方法を挙げましたが、主チャイタンニャは、「どれも優れた方法とは言えない」と答えました。ラーマーナンダが意見を言うたびに主チャイタンニャは否定し、精神的に高められるもっと良い方法を尋ねました。最後にラーマーナンダは、神を理解するには不必要な推論をすべて捨てるよう勧めるヴェーダの格言を引用しました。推論では決して究極の真理に到達できないからです。たとえば科学者は、遥かかなたにある星や惑星について推測していますが、じっさいに体験しなければ結論は出せません。全生涯を推論に費やしても、結論には到達できないということです。

特に、神について学ぶときに推論は役に立ちません。ゆえに『シュリーマド・バーガヴァタム』はいっさい推論をしてはいけない、と勧めています。従順な気持ちになり、自分はちっぽけな存在であること、また地球は広大な宇宙に浮かぶ小さな点にすぎないことを受け入れるのです。ニューヨーク市は大都市に見えるかもしれませんが、地球がこれほど小さな存在であることがわかれば、また合衆国もその地球の小さな場所であること、その合衆国にあるニューヨーク市がさらに小さな点にすぎないことがわかれば、自分がどれほど小さな存在かがわかるはずです。神の宇宙と比べた私たちの存在の小ささがわかれば、知ったかぶりをするのはやめて服従心を持つべきです。カエル博士の哲学の犠牲になってはいけません。

ある井戸にカエルが住んでいました。訪ねてきた友人から大西洋について聞いたカエルは、その友人に聞きました。

「へえ、大西洋とはどういうところなの？」

「とてつもない量の水が広がっているところだよ」

「広い？ どのぐらい？ この井戸の倍はあるの？」

「とんでもない。もっとはるかに広いよ」

「もっと広い？ 10倍ぐらい？」

これがカエルの計算です。しかし、そんな頭で大西洋の深さや広さが理解できるでしょうか。私たちの能力、経験、空想力には必ず限界があります。このカエル博士の哲学と大差ありません。だからこそ『シュリーマド・バーガヴァタム』は、至高者を理解しようとする憶測をやめるよう助言しているのです。

推論がだめなら、どうしたらいいのでしょうか。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、従順な気持ちで神のことばを素直に聞くよう教えています。神のことばは『バガヴァッド・ギーター』や他のヴェーダ経典、聖書、コーランなど、正しい経典ならどこにでも見つかりますし、あるいは悟った人物から聞くこともできます。大切なことは、自分勝手に想像しないこと、神について素直に聞く、という点です。素直に聞いたらどういう結果が得られるのでしょうか。貧しくても、裕福でも、アメリカ人、ヨーロッパ人、インド人、ブラーフマナ、シュードラ、いやだれであろうとも、神の超越的なことばを聞けば、どのよ

うな力にも征服されない主を、愛情によって征服できます。アルジュナはクリシュナの友人でしたが、至高主神であるクリシュナはアルジュナの御者となって召使いの立場を受けいれました。アルジュナはクリシュナを心から愛し、クリシュナもそのようにアルジュナの愛情に応えたのです。おなじように、クリシュナは幼いころ、父親のナンダ・マハーラージャの靴を自分の頭の上に乗せ、父親に仕えました。クリシュナと一体になろうと努力する人たちがいますが、じつはその状態さえ超えることができます。神の父親になれるのですから。もちろん、神はすべての生命体の父親で、そして神に父親はいませんが、それでも自分の献愛者、愛する人を父親として選びます。クリシュナは、愛情ゆえに献愛者に服従することがあります。大切なことは、主のことばを一心に聞こうとする姿勢です。

シュリー・クリシュナは『バガヴァッド・ギーター』の第7章で、日々の暮らしのなかで毎瞬間主を感じる方法を教えています。

プニョー ガンダハ プリティヴァーンム チャ
puṇyo gandhaḥ pṛthivyām ca

テージャシュ チャースミ ヴィバハーヴァサウ
tejaś cāsmi vibhāvasau

ジーヴァナンム サルヴァ・ブフターシュ
jīvanam sarva-bhūteṣu

タパシュ チャースミ タパスヴィシュ
tapas cāsmi tapasviṣu

「わたしは、土が持つ本来の香りであり、火の中の熱である。わたしは生きとし生けるものすべての命であり、あらゆる苦行者がおこなう苦行そのものである」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第9節)

Puṇyo gandhaḥ (プニョー ガンダハ) は「香り」のことです。クリシュナだけが味や香りを作り出すことができます。私たちも似たような味や香りを作ることはできますが、自然界にある本物ほど素晴らしいものではありません。芳(かぐわ)しい自然な香りを嗅いで「これは神、クリシュナ」と感じ、自然の美しさを見て「これがクリシュナだ」と感じることができます。また、並外れたもの、力強い、あるいは驚くべきものを見れば、「これがクリシュナ」と感じることができます。あるいは、木、動物、人間など、どんな姿の生物でも、その命はクリシュナの部分体であると理解しなくてはなりません。クリシュナの部分体である精神的火花がその体から去っていけば、体は腐っていくばかりです。

ビージャンム マーンム サルヴァ・ブフターナーナム
bījam mām sarva-bhūtānām

ヴィッデヒ パールタハ サナータナンム
viddhi pārtha sanātanam

ブッデヒル ブッデヒマターンム アスミ

buddhir buddhimatām asmi

テージャス テージャスヴィナーナム アハンム
tejas tejasvinām aham

「プリターの子よ。わたしは全存在物の種であり、聡明な者の知性であり、あらゆる強靱な者の力である」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第10節)

この節でも、クリシュナが全生物の命の源であることがはっきりと説明されています。このように理解することで、私たちは神を毎瞬間見ることができます。よく「私に神が見せられるか」と挑戦する人がいます。もちろん、できます。神はさまざまな方法で見ることができるのです。しかしそう言いながら、目を閉じて「神を見るつもりはない」と言うのであれば、見られるわけがありません。

この節の *bījam* (ビージャン) は「種」という意味で、その種は永遠 (*sanātanam*・サナータナン) と明言されています。巨大な木が立っている——では、その源は？ それはその種であり、そしてその種は永遠です。全生物の内に存在の種があります。体は数多くの変化をつづけます——母親の胎内で成長し、赤ん坊として外界に出て、子ども、大人へと。しかし、その肉体の中にある存在の種は永遠です。だから *sanātanam* (サナータナン) ということばが使われています。肉体は、目には見えない状態で毎瞬間変化しています。しかし、*bījam* (ビージャン) 「種」、すなわち精神的火花は変わりません。クリシュナは「わたしは存在するものすべてのうちにあるこの永遠な種である」と自ら宣言しています。クリシュナの恩寵なくして、ずば抜けた知性を授かることはありません。だれでも他人より賢くなろうと努力していますが、クリシュナの恩寵がなければそれは実現しません。ですから、ひじょうに賢い人物を見るときには、「その知性はクリシュナである」と考えるべきです。おなじように、強い影響力を見せる人もクリシュナの現われです。

バラナム バヴァヴァターナム チャーハンム
balam balavatām cāham

カーマ・ラーガ・ヴィヴァルジタンム
kāma-rāga-vivarjitam

ダハルマーヴィルッダー ブハーテーシュ
dharmāviruddho bhūteṣu

カーモー アスミ バハラタルシャバハ
kāmo 'smi bharatarṣabha

「バーラタ王家の主(アルジュナ)よ。わたしは、激情も欲望もない力強き者の力である」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第11節)

象やゴリラはととても力のある動物ですが、その力はクリシュナから授かっています。人間にはそのような力が出せませんが、クリシュナの恩寵があれば象よりも何千倍もの力を発揮できます。クルクシェートラの戦場で戦った偉大な兵士ビーマは、象の1万倍の力を

持っていたと言われています。おなじように、欲情・カーマ (kāma) も、宗教原則に反していなければクリシュナとして見ることができます。その欲情とは？ 一般的には性生活を指しますが、この節にある kāma・カーマは、宗教原則に反していない性生活、つまり、優れたクリシュナ意識の子どもをもうけるための性生活のことです。それができるのであれば、何度でも夫婦の交わりはできますが、犬や猫のような子どもしか作れないのであれば、その性生活は宗教に反しています。宗教的・文化的な社会では、結婚とは優秀な子どもを作るために夫婦が性生活をすることを指しています。ゆえに、結婚したうえでの性生活は宗教的であり、未婚でありながら性行為をするのは反宗教的です。じっさい、世帯者の性行為が宗教原則に従っていれば、サンニャーシーと世帯者に違いはありません。

イエー チャイヴァー サートトウヴィカー バハーヴァー
ye caiva sāttvikā bhāvā

ラジャサース ターマサーシュ チャ イエー
rajasas tāmasās ca ye

マッタ エーヴェーティ ターン ヴィッデヒ
matta eveti tāt viddhi

ナ トウヴ アハン テーシュ テー マイ
na tv ahaṁ teṣu te mayi

「あらゆる存在——徳性、激性、無知——は、わたしのエネルギーの現われである。ある意味でわたしはすべてである、しかしまったく独立した存在でもある。わたしは、物質自然界のいかなる様式にもかかわっていない」（『バガヴァッド・ギーター』第7章・第12節）

クリシュナに尋ねる人がいるかもしれません。「あなたは音、水、光、香り、万物の源である種、力、カーマ・欲望である、と言っておられるが、それは、あなたが徳性の中だけに存在しているということなのか」と。物質界には徳性・激性・無知という3つの質があります。これまでクリシュナは自らを「善なる物事そのもの」と説明してきました（たとえば、既婚のセックスは宗教原則に基づいている、という点）。しかし、ほかの質ではどうでしょうか。その中にクリシュナは存在しないのでしょうか。その答としてクリシュナは、物質界で見られるものはすべて物質自然の3つの質の相互作用で起こる、と説明しています。私たちが目にするものはなんであろうと、それは徳性・激性・無知の組みあわせであり、そのすべてが「わたしによって作られた」ということです。クリシュナに作られたものですから、その存在自体はクリシュナの内にありますが、クリシュナは三様式を超えた存在ですからその中にはいません。この理由から、ある意味では無知によって作られた邪悪なことであっても、クリシュナがした場合は、それらもクリシュナである、と言えます。どうしてそんなことが言えるのでしょうか。例を挙げてみます。電気技師は電気を作りだします。家庭ではその電気が冷蔵庫の冷却装置として使われ、逆に電気ストーブのように暖房装置としても使われています。しかし、その電気を出している発電所の電気は冷たくも

熱くありません。このエネルギーの現われ方は、私たちには異なってもクリシュナにはおなじです。そのため、クリシュナがすることは時には激性や無知の状態でおこなわれているように見えても、電気技師にとって電気エネルギーは電気以外のなにものでもないように、クリシュナにはクリシュナそのものです。電気技師は「こちらは冷たい電気」とか「あちらは熱い電気」という区別はしません。

すべてはクリシュナによって作られました。そして『ヴェーダーンタ・スートラ』もその事実を裏づけています。Athāto brahma jijñāsā (アタートー ブラフマ・ギギヤーサー)、janmādy asya yataḥ (ジャンマーディ アッシャ ヤタハ)「すべては最高絶対究極者から発出されている」。生命体が良いとか悪いとか考えている物事は、ただ生命体だけにあてはまることです。生命体がそのように条件づけられているからです。しかし、クリシュナは条件づけられていませんから、クリシュナにとって善悪はありません。私たちは条件づけられているために二元性に苦しめられていますが、クリシュナにとってすべては完璧です。

第 4 章 愚者が歩く道、賢者が歩く道

このように、クリシュナはありのままの自分を説明しています。それでも私たちはクリシュナに惹かれません。なぜでしょう。その理由も、クリシュナが説明しています。

ダイヴィー ヒ エーシャー グナマイー
daiṁ hy eṣā guṇa-mayī

ママ マーヤー ドウラテヤヤー
mama māyā duratyayā

マーンム エーヴァ イェー プラパデヤンター
mām eva ye ṣṛapadyante

マーヤーンム エーターンム タランティ テー
māyām etām taranti te

「わたしのこの神聖な力は、物質自然の3つの質で構成されており、克服するのはじつに難しい。しかし、わたしに身をゆだねる者はたやすく超えられる」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第14節)

物質界は、物質自然の3つの質によってゆがめられています。物質界にいる生命体はすべてこの質に影響されています。徳性の影響を受けているのであればブラーフマナ、激性に影響されていればクシャトリヤ、激性と無知に影響されていればヴァイシャ、無知に影響されていればシュードラです。これは、誕生や社会的な地位で決められる表面上の区別ではなく、グナ、すなわち自分の活動をコントロールしている自然の質で決定されます。

チャートウル・ヴァルニヤンム マヤー スリシュタンム

cātur-varṇyam mayā sṛṣṭam

グナ・カルマ・ヴィバーガシャハ
guṇa-karma-vibhāgaśaḥ

タッシャ カルターランム アピ マーンム
tasya kartāram aṇi mām

ヴィッディ アカルターランム アヴァヤンム
viddhy akartāram avyayam

「物質自然の三性質、またそれぞれの質が作りだす活動に沿った人間社会の4つの区分が、わたしによって作られた。そしてあなたは、わたしがそのような活動者ではないことを知らなくてはならない。わたしは不変な存在だからである。」(『バガヴァッド・ギーター』第4章・第13節)

この分類は、現代のインドのゆがんだカースト制度を指しているのではありません。シュリー・クリシュナは特に *guṇa-karma-vibhāgaśaḥ* (グナ・カルマ・ヴィバーガシャハ) と述べています。人間はグナ、つまり各人が行動している様式に応じて区分され、これは全宇宙の人類にあてはまります。主クリシュナのことばについて私たちがよく心得ておくべきことは、どんな内容であっても、それは無限かつ普遍的真理であるという点です。主は自らを全生命体の父と宣言しています。動物、水生動物、木、植物、虫、鳥、蜂など、どんな生き物でも主の子どもです。シュリー・クリシュナは、全宇宙が物質自然の三様式の影響に惑わされ、私たちはその幻想の魔力に縛られている、と断言しています。だから神の正体が理解できないのです。この幻想はどのような質を持ち、またそれをどう克服したらいいのでしょうか。そのことも『バガヴァッド・ギーター』で説明されています。

ダイヴィー ヒ エーシャー グナマイー
daiṇi hy eṣā guṇa-mayī

ママ マーヤー ドウラテヤヤー
mama māyā duratyayā

マーンム エーヴァ イェー プラパデヤンテー
mām eva ye prapadyante

マーヤーンム エーターンム タランティ テー
māyām etām taranti te

「わたしのこの神聖な力は、物質自然の三性質で構成されており、克服するのはじつに難しい。しかし、わたしに身をゆだねる者はたやすく超越することができる」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第14節)

心の推論の力に頼っても、物質自然の三性質の束縛からは逃れられません。この3つのグナはひじょうに力強く、克服するには困難をきわめます。物質自然の掌中にあることを、だれでも感じるはずです。グナ (*guṇa*) ということばは「ひも」の意味もあります。3本

の頑丈なひもで縛られれば、身動きできないのは当然です。私たちの手足は徳性・激性・無知という頑丈なひもでがんじがらめに縛られています。では、もう希望はないのでしょうか。いいえ。この節でシュリー・クリシュナが言っています、「わたしに身をゆだねる人はすぐに自由になれる」と。どのような手段であれ、なんとかしてクリシュナ意識に辿りつけば、必ず自由になれるのです。

だれもがクリシュナの子ですから、クリシュナと関係があります。子どもが親と意見を異にすることもあります、親子関係を断ちきることはできません。自分の身元を尋ねられれば「私はこういう名前の子の子どもです」という言い方をするでしょう。その関係を断ちきることはできません。このように、私たちはだれでも神の子どもで、その関係は永遠なのですが、それをすっかり忘れています。クリシュナはあらゆる力・名声・富・美・知識・放棄心をそなえている方です。私たちはそのような偉大な方の友人なのに、そのことを忘れています。裕福な父親を持つ子はその父親を忘れ、家出をし、頭がおかしくなり、路上で寝起きし、食べるために道行く人たちにお金をせがむようになったら、それは父親を忘れてしまったことが原因です。それでもだれかが、「あなたはお父さんの家を出たから苦しんでいるのです。お父さんはとても裕福で、大変な資産家で、あなたにとっても会いたがっています」と教えてくれたら、その人物はすばらしい恩人と言えます。

私たちは、自分の体と心、他の生物、自然災害という3つの苦しみのためにこの世界で苦しんでいます。物質自然に惑わされ、幻想に包まれているために、その苦しみを気にもとめません。しかし、自覚すべきことは、物質界ではいつも大きな苦しみにいためつけられている、という事実です。高い意識を持つ人や賢い人なら、苦しみの理由を自問するはずで、「私は苦しみを求めているわけではない。なぜこんなに苦しむのか」と。こう尋ねる人がクリシュナ意識になれる機会にめぐまれます。

クリシュナに身をゆだねたら、クリシュナはすぐに心から迎えてくれます。離れていた子どもが父親の家に帰り、言います。「お父さん。僕は誤解していたので、お父さんの保護を拒み、苦しみました。でも、こうしてもどってきました」。父親は我が子を抱きしめながら言うでしょう、「よくもどってきてくれた。おまえが行ってしまったあと、私は心配でした。かたがなかつた。もどってきてくれてほんとうに嬉しいよ」と。父親の心はとても優しいのです。私たちもこのような状態にいます。クリシュナに身をゆだねるのは難しいことではありません。息子が父親に従うのは難しいことでしょうか。それは自然なことですし、父親はいつでも我が子を受け入れる気持ちでいます。身をゆだねても自尊心が傷つけられることはありません。至高の父親である主にひれ伏し、主の御足に触れるとき、私たちが傷つけられるはずがないし、また難しいことでもありません。それどころか、私たちに栄誉あることなのです。主にひれ伏すことを拒む必要がどこにあるのでしょうか。クリシュナに身をゆだねれば私たちは守られ、あらゆる苦しみから救われます。すべての経典がそのことを断言しています。『バガヴァッド・ギーター』の最後の章でシュリー・クリシュナが説いています。

サルヴァ・ダハルマーン パリテヤジャ
sarva-dharmān parityajya

マーンム エーカンシャラナンム ヴラジャ
mam ekaṁ śaraṇaṁ vraja

アハンム トウヴァーンム サルヴァ・パーペービョー
aḥaṁ tvāṁ sarva-pāṇebhyo

モークシャイツシャーミ マー シュチャハ
mokṣaiṣyāmi mā śucaḥ

「すべての宗教を捨て、ひたすらわたしに身をゆだねよ。そうすれば、罪なおこないすべての反動からあなたを救う。恐れてはならない」(『バガヴァッド・ギーター』第18章・第66節)

主の御足に身をゆだねれば私たちは主に守られ、どんな恐れも感じなくなります。両親に守られている子は、自分が傷つけられるのをお父さんやお母さんが黙ってみているわけがないことを知っていますから、なにをも恐れなくなります。Mām eva ye prapadyante (マーメーヴァ イェー ブラパデヤンテー)。クリシュナは「わたしに服従する者に恐れはなくなる」と約束しています。

クリシュナに身をゆだねることがこれほどかんたんなことなのに、なぜ人々はそうしないのでしょうか。ゆだねるところか、神に挑戦し「頼れるのは自然や科学であって、神にすがっても無駄である」と言う人たちもいます。いわゆる文化の発達と考えられる知識でも、じつは人々がますます異常な状態に陥っていることの証です。病が治るところか、さらにひどくなっているのです。だれもが神に無関心になっています。関心をしめず対象は自然界ですが、あいにく自然界のほうは、3種類の苦しみという形で人間を1日24時間蹴飛ばしつづけています。ところが、蹴飛ばされることに慣れてしまった私たちは、「しかたがない、いつものことだ」と考えています。人間は自分の教育を自慢していますが、じつはそれは物質自然界に向かって「私を蹴飛ばしていただき、ありがとうございます。これからもよろしく願いいたします」と言っているのとおなじなのです。このように惑わされているのに、人間は「われわれは物質自然界を征服した」と考えています。そんなことがありますか？ 自然は私たちに今でも誕生・老年・病気・死という苦しみを押しつけています。この問題をひとつでも解決した人間がいるのでしょうか。知識や文化面でどれほど発達したというのでしょうか。物質自然の厳格な法則に縛られているのに、「私たちは自然を征服した」と思いこんでいる。これがマヤーです。

父親の知識は限られていますから、父親にすべて服従できないのはやむをえませんが、クリシュナはふつうの父親とは違います。クリシュナは無限な方で、完全な知識・力・富・美しさ・名声・放棄心を持つ方です。そのような父親を持ち、その所有物を楽しめる私たちの幸運を喜ぶべきではないでしょうか。ところが、だれもそう考えず、「神はいない」と公言している。なぜ人々は神を求めようとしないのでしょうか。『バガヴァッド・ギーター』

の次の節がその答です。

ナ マーンム ドウシュクリティノー ムーダハーハ
na mām duṣkṛtino mūdḥāḥ

ブラパデヤンター ナラーダハマーハ
prapadyante narādhamāḥ

マーヤヤーパフリタ ギャーナ
māyayāpahṛta jñāna

アースランム バハーヴァンム アーシュリターハ
āsuram bhāvam āśritāḥ

「このうえなく愚かで、人類のなかでも最低で邪悪な者、幻想によって知識を奪われている者、悪魔が持つ無神論的気質を持つ者は、わたしに服従しない」（『バガヴァッド・ギター』第7章・第15節）

これが、『バガヴァッド・ギター』が私たちにしめす愚か者の分類です。ドウシュクリティ（*duṣkṛtī*）はいつも経典の教えにそむいたことをしています。現代文化では経典の規則を破ることだけがおこなわれています。敬虔な人を定義するならば、そういうことをしない人、と言えます。ドウシュクリティ（*duṣkṛtī*）「邪悪な行動者」とスクリティ（*sukṛtī*）「徳高い人物」を区別する基準があるはずです。どんな国にも経典があります——キリスト教、ヒンドウ教、イスラム教、仏教など。けれども、どんな宗教であろうと問題ではありません。大切なのは、典拠となる本、つまり経典があるということです。その教えに従わない者は無法者ということになります。

この節でしめされている概念がムーダ（*mūdḥa*）「一番の愚か者」です。ナラーダマ（*narādhamā*）は人間社会の低俗な者を指し、*māyayāpahṛta jñāna*（マーヤヤーパフリタ・ギャーナ）は、マーヤ・幻想に知識を奪われている者を指します。*Āsuram bhāvam āśritāḥ*（アースラン バハーヴァン アーシュリターハ）は、発狂している、あるいは頑固な無神論のことです。神である父に身をゆだねても損はしないのに、かれらはそうしません。その結果、父の代表者によっていつまでも罰せられます。殴られ、鞭で打たれ、蹴飛ばされ、苦しみつづけるのです。父親は、言うことを聞かない子を懲らしめることがあります。物質自然界はある種の罰則を使います。またそのいっぽうで、食糧やその他の必要物資を私たちに与え、養ってくれます。私たちがとても裕福な父親の子だからこそ、その両方がおこなわれているのですが、心優しいクリシュナは服従しない人間でさえ養っています。ところが、神なる父に物資を授かっているのに、ドウシュクリティは人として許されていないことをします。罰せられつづけることは愚かです。人間生活という機会をクリシュナを理解することに使わないのも低俗な人間の証です。人間であっても、自分の生活を真の父親との絆をよみがえらせるために使わなければ墮落していくしかありません。

動物は食べ、眠り、身を守り、交尾をし、そして死んでいきます。動物は高い意識を活用することができません。下等な生き物はそれができないのです。人間が動物とおなじこ

とをしながら、意識を高められる能力を使わなければ、人間の枠からはずれ、来世で動物の肉体に入る準備をしていることとなります。クリシュナのおかげで、私たちは高く発達した肉体と知性を授かりましたが、それを利用しなければ、またおなじ体をもらえないのは当然です。人間の体は何百何千万年という進化のあとに得られるものであり、この体こそが、800万種類の生物の体を変遷する生と死の繰りかえしから抜けだせる唯一の機会なのです。この機会はクリシュナの好意で授かるのであり、それを利用しない人は、人間のなかでも下等な状態にあると言えます。どこかの大学の M.A.とか Ph.D (哲学博士)の肩書きを持っていても、幻想の力はそんな俗な知識など奪いさってしまいます。ほんとうに賢い人物は、自分の正体について、神の正体について、物質自然界の本質について、自分がこの世界で苦しんでいる理由について、そしてその苦しみの治療法などについて答を見つけるために知性を使うはずで

人間は、知性を駆使して自動車、ラジオ、テレビを感覚満足のために作りましたが、それは真の知識ではありません。略奪した知性です。知性は人生の問題を理解するために与えられているのですが、今それがまちがって使われています。人間は、車を作って運転する方法を知ったから知識を得たと考えていますが、車ができるまえから人々は地上を移動していました。車ができたからその便宜が増えただけのことであり、増えたからこそ問題も出てきます——大気汚染や車の渋滞です。これがマーヤーです。便宜を作ったと考える、しかし、逆にその便宜のために別の問題を山ほど作りだしてしまっ

このような便宜や快適な環境を作るためにエネルギーを無駄にするのではなく、自分たちの正体を理解するために知性を使わなくてはなりません。だれも苦しみたいとは思っていませんが、苦しむ理由を理解する必要があります。いわゆる「知識」を使って人間は原爆を作るのに成功しました。殺戮が加速されたということです。科学者は「これこそ知識の発達だ」と誇っていますが、死ぬのを止める薬を作ってこそ、ほんとうに発達した知識を作ったと言えるのではないのでしょうか？ 物質自然界ではだれもが必ず死ななくてはなりません、人間は1発の原爆で人を皆殺しにする技術を高めようと躍起になっています。これが *māyayāpahṛta jñāna* (マーヤーパフリタ・ジャーナ)、すなわち幻想に駆られた知識です。

アースラ (悪魔) や、自分を無神論者と自称する者は、神に挑戦していることとなります。至高の父親がいなければ太陽の光さえ見られないのですから、挑戦することの意味がかれらにはわかっていません。ヴェーダは、2種類の人類、すなわちデーヴァ (*deva*) とアースラ (*āsura*)、「半神と悪魔」がいると述べています。デーヴァとは誰のことでしょうか？ 至高主の献愛者をデーヴァといますが、それは献愛者が神のような存在になるからです。いっぽう、至高者の権威を否定する人間をアースラ、邪悪な者と呼びます。この2種類の人間はつねに人間社会にいます。

クリシュナに服従しない人間が4種類いるように、主を崇拜する幸運な4種類の人々がいて、次の節でその資質が説明されています。

catur-vidhā bhajante mām

ジャーナー スクリティノー アルジュナ
janāḥ sukṛtino 'rjuna

アールトー ジギャースル アルタハールティー
ārto jijñāsur arthārthī

ジャーニー チャ バハタルシャバハ
jñānī ca bharatarṣabha

「バーラタ家でもっとも優れた者（アルジュナ）よ。4種類の敬虔な人間がわたしに献愛奉仕をする。苦しむ者、富を求める者、詮索好きな者、絶対者の知識を求めている者のことである」（『バガヴァッド・ギター』第7章・第16節）

物質界は苦しみに満たされ、敬虔な人でも不信心な人でも必ず苦しみます。冬の寒さは、信心深い人にも、不信心な人にも、裕福な人にも、貧しい人にもおなじように苦しみとして感じられます。しかし、敬虔な人と不信心な人の違いは、前者が苦しいときには神のことを考えるという点にあります。苦しんでいる人はよく教会で神に祈ります、「主よ。私は困っています。どうか助けてください」と。なにか物質的なものを求めて祈ってはいませんが、苦しまないよう神に救いを求めているのですから、信心深いと言えます。おなじように、貧しい人も教会で祈ります、「主よ。どうか私にお金をお与えください」と。いっぽう、追究心の強い人はたいてい優れた知性を持っているものです。さまざまな物事を深く理解しようとし、神とは？と尋ね、その答を見つけるために科学的に調べたりします。そのような人たちも、正しい対象に追究心が向けられているのですから、敬虔な人間と言えます。知識を持つ人をジャーニー（*jñānī*）「自分本来の立場を理解した者」といいます。ジャーニーは神には姿や形がないと考えていますが、究極の存在、最高絶対真理者（神）に救いを求めているので、敬虔な人間です。この4種類の人間は、神を求めていることからスクリティー（*sukṛtī*）「敬虔な者」と呼ばれます。

テーシャーンム ジャーニー ニテヤ・ユクタ
teṣāṁ jñānī nitya-yukta

エーカ・バハクティル ヴィシッシャテ
eka-bhaktir viśiṣyate

プリヨー ヒ ジャーニノー アタルタハンム
priyo hi jñānino 'tyartham

アハンム サ チャ ママ プリヤハ
ahaṁ sa ca mama priyaḥ

「この中で、わたしと結ばれ、純粋な献愛奉仕をしながら完全な知識を持つ賢者がもっとも素晴らしい。そのような人物はわたしを愛しく思い、またわたしもその人物を愛しく思うからである」（『バガヴァッド・ギター』第7章・第17節）

神を求める4種類の人間のなかで、哲学的に神の質を理解しようとする者、クリシュナ意識になろうとする者 (viśiṣyat・ヴィシッシャター) がクリシュナに愛される資格を一番そなえています。クリシュナも、「そのような人物は神を理解すること以外に関心がないからとても愛しく思う」と言っています。その他の人々はこの人物に比べれば、劣っています。神になにかを求めて祈る必要などありませんし、そうするのは愚かなことです。なぜなら、全知の神が自分の心のなかにおいて、苦しんでいたりお金に困ったりしているのを神は見通していることを知らないからです。賢い人はそれがわかっていますから、物質的な苦しみから救われるために祈ったりはしません。逆に、神を讃えるために祈り、神がどれほど偉大な方かをほかの人たちに教えようとします。食べ物や住む場所といった個人的な興味のためには祈りません。純粋な献愛者は、自分が苦境にあるとき、「主よ。これはあなた様の優しさです。私を正すためにこの苦しみを与えてくださいました。ほんとうならもっと苦しむはずのところを、あなた様は慈悲の心から苦しみを和らげてくださいました」と考えます。これが、心を乱さない純粋な献愛者の見方です。

クリシュナ意識の人は、物質的な苦しみ、侮辱、称賛に心を動かされません。自分とは関係がないことを知っているからです。苦しみ、称賛、冒瀆などは肉体だけにかかわるものです。しょせん肉体と自分は違うのですから。たとえば、ソクラテスは魂が不死であることを知っていましたから、死刑を宣告され、どう埋葬されたいかと尋ねられたとき、「最初に私を捕まえなくてはならない」と答えました。このように、自分が肉体ではないことを知っている人は、魂は捕まえられず、拷問を受けたり殺されたり、また埋葬されたりしないとわかっていますから、乱されません。クリシュナの科学を熟知している人物は、自分は体ではなくクリシュナの部分体であり、ほんとうの関係はクリシュナとの間にあり、今は物質の体に入れられていても、なんとかして物質自然の3つの質から離れなくてはならない、と完璧に理解しています。徳性・激性・無知の質にはかかわらず、クリシュナだけにかかわっているのです。このように理解している人物をギャーニー・賢い人物といい、クリシュナには愛しい人です。苦しんでいた人はひとたび富を与えられると神を忘れてしまいますが、神のことを正しく理解しているギャーニーは、神を忘れることはありません。

ギャーニーの中には「非人格論者」と呼ばれる人々がいて、「形のないものを崇拜するのは難しいことだから、神の姿は想像すべきものである」と主張しています。かれらは正しいギャーニーではなく、ただの愚か者です。神はこのうえなく偉大な方ですから、その姿を「想像」することはできません。姿や形として想像できても、それはただの作り事であり、ほんとうの姿ではありません。神の姿を想像あるいは否定する人たちがいますが、どちらもギャーニーではありません。神の姿を想像する人たちを偶像破壊主義者といいます。インドでヒンドゥー教とイスラム教が衝突していた時代に、ヒンドゥー教徒の一部がイスラム教の寺院で神を表わす像や画像を破壊し、イスラム教徒もそれに対抗していました。互いに「われわれはヒンドゥー教の神を殺した。われわれはイスラム教の神を殺した」と考えていたのです。おなじように、ガンジーが抵抗運動を指揮していたとき、多くのイン

ド人が道路に設置してあった郵便ポストを壊しましたが、そうすることで政府の郵政事業を破壊していると考えていました。このような考えを持つ人たちはギャーニーではありません。ヒンドゥー教とイスラム教、そしてキリスト教と反キリスト教の間に起こった宗教戦争は、無知が原因です。知識に立脚した人は、神が一人であることを良く知っています。神はイスラム教でも、ヒンドゥー教でも、またキリスト教でもありません。

人間は神の姿をあれこれ考えますが、それはただの想像にすぎません。賢い人は、神が超越的な方であることをよく知っています。「神は物質的な概念を超越した姿を持っている」と考える人が神を真に理解しています。神はいつでも私たちのすぐ横に、心の中にいます。私たちが死んで体を離れるときもいっしょに体を離れ、そして私たちが別の体に入っても、私たちがその体で何をするかを見ています。いつになったら私たちは神に顔を向けるのでしょうか。主はいつも待っています。私たちが主に顔を向けたとき、主は「我が子よ、もどってきなさい。Sa ca mama priyah (サ チャ ママ プリヤハ) ——お前はわたしにとっていつまでも愛しい。今やっとわたしに顔を向けてくれて、わたしは嬉しく思っている」と言います。

賢い人・ギャーニーは神の科学を正しく理解しています。単に「神は偉大である」と考えるのは初歩的な段階ですが、神がどれほど偉大で素晴らしいかを理解している人は、さらに発達した境地にあります。その知識は『シュリーマド・バーガヴァタム』と『バガヴァッド・ギーター』にあります。神に対して心から興味をしめす人は、『バガヴァッド・ギーター』にあるように、神の科学を学ぶべきです。

イダンム トウ テー グヒヤタマンム
idam tu te guhyatamaṁ

プラヴァクシャーミ アナスーヤヴェー
pravakṣyāmy anasūyave

ギャーナンム ヴィギャーナ・サヒタンム
jñānaṁ vijñāna-sahitaṁ

ヤジ ギャートウヴァー モークシェセー シュバハートウ
yaj jñātvā mokṣyase 'śubhāt

「アルジュナよ。あなたはわたしを少しも妬んでいないから、このもっとも秘奥な知識を授けよう。この知識を知れば、物質存在の苦しみから救われる」(『バガヴァッド・ギーター』第9章・第1章)

『バガヴァッド・ギーター』で説かれている神の知識には、深遠で秘奥な意味がこめられています。ギャーナ・哲学的知識とヴィギャーナ・科学的知識で満たされています。また神秘的知識も含まれています。どうすればこの知識が理解できるのでしょうか。この知識は神自ら、あるいは神の真の代表者から授けられます。だからこそシュリー・クリシュナは、「神の科学の理解に矛盾が生じたときに、わたしはいつでも降誕する」と言っています。

また、知識は感傷的な気持ちをとおして得られるものではありません。献愛奉仕は決して

感傷的ではないのです。科学です。シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーは、「理性、論拠、知識をとおして献愛奉仕の甘露を味わい、そしてその甘露をほかの人々に伝えなくてはならない」と説いています。クリシュナ意識を単なる感傷主義だと思っはなりません。クリシュナ意識でおこなわれる踊りや歌はすべて科学的です。科学も、そして愛情の交換もあります。クリシュナは賢い人にはこよなく愛しい存在であり、また賢い人もクリシュナにとって愛しい存在です。クリシュナは私たちの愛情に何千倍もの愛情で応えてくれます。私たちのような限りある生物がクリシュナを愛そうとしても、その能力には限りがあるかもしれません。それでもクリシュナは広大な、いいえ無限の包容力を持っているのです——私たちの愛情に対して。

第 5 章 至高者を目指して

ウダーラーハ サルヴァ エーヴァイテー
udārāḥ sarva evaite

ジャーニー トゥヴ アートウマイヴァム メー マタンム
jñānī tv ātmaiva me matam

アースティタハ サ ヒ ユクタートウマー
āsthitaḥ sa hi yuktātmā

マーンム エーヴァーヌッタマーンム ガティンム
mām evānuttamām gatim

「この献愛者たちは確かに寛大な魂であるが、わたしの知識に立脚している人物こそ、わたしの内に住んでいるとわたしは考える。わたしに崇高な奉仕をしているから、わたしに到達するのである」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第18節)

この節で主クリシュナは、「わたしを求めるのであれば、苦しんでいる者、お金を必要としている者、知識を求めている者など、どのような状態にあっても喜んで迎えるが、なかでも知識に立脚している者はとても愛しい」と言っています。他の人々も、神に辿りつく道を歩いていけばやがて知識を持つ人物とおなじ境地に到達しますから、主に歓迎されます。しかしほとんどの場合、金目的で教会で祈ってもそれが実現しないと、神に頼んでも無駄だと決めつけ、教会には二度と行かなくなります。これが、下心で神に近づく危険性です。たとえば第二次世界大戦中、ドイツ兵の妻たちは、戦場に行った夫が無事にもどってこられるよう教会で祈りましたが、結局戦死してしまうと無神論に心変わりしました。これは、人々が神を「注文を叶えてくれる相手」として求めているからで、それを満たしてくれなければ「神はいない」と言います。これが物欲で祈る結果です。

このことに関連して、ドウルヴァ・マハーラージャという5歳の男の子の話があります。ドウルヴァは王家に生まれました。父親でもある王はその子の母親に飽きて、女王の地位から退けました。次に別の女性を女王としてめとったので、その女性がドウルヴァの継母

になりました。新しい女王はドウルヴァのことをうとましく思い、ある日かれが父親の膝の上に座っていたのを見て、「おまえはお父様の膝に座ってはいけません。私の子ではないのだから」と言って侮辱しました。ドウルヴァは継母に父親の膝から降ろされ、ドウルヴァはとても怒りました。短気な気質を持つのがクシャトリア階級で、ドウルヴァにもその血が流れていました。侮辱されたドウルヴァは、見捨てられた母親のところに行きました。

「お母様」と話しかけます。「あの女王が、お父様の膝に座っていた僕をひきずりおろしました」

お母さんが答えました。「ドウルヴァよ。私にはなにもできない。私は無力で、王はもう私に愛情を注いでくださらない」

「では、どうしたら復讐できるでしょうか」とドウルヴァが聞きます。

「そなたも無力であることにかわりありません。神様が助けてくだされば、復讐できますよ」

そう聞いたドウルヴァは真剣になって聞きかえしました。「では、神様はどこにいらっしゃるのです？」

「多くの聖者が密林や森に入って神様を見ようとしています。心からの改悛と苦行を重ね、神を見るために励んでいるのです」

ドウルヴァはすぐさま王宮をあとにして森に入りました。そして虎や象に「あなたは神ですか？」と聞きました。このようにして、動物すべてに尋ねながら歩きました。ドウルヴァが森をさまよっていることを知ったシュリー・クリシュナは、様子確かめるためにナーラダを送りました。

ナーラダがドウルヴァに聞きます、「ドウルヴァよ。おまえは王家の子どもだ。このような苦行に耐えられるわけがない。家にもどりなさい。父も母もおまえのことをたいそう心配しているのだよ」

「どうか、そのような気休めを言わないでください。神についてなにかご存知なら、またはどうしたら神に会えるかご存知なら、教えてください。そうでなければ、どうか私を邪魔せずに、ひとりにしておいてください」

ナーラダはドウルヴァの決心の固さを知って弟子として入門させ、*om namo bhagavate vāsudevāya* (オーム ナモー バガヴァテー ヴァースデーヴァーヤ) というマントラを授けました。ドウルヴァはこのマントラを一心に唱えつづけ、完璧な人間になり、神はついにそのまえに姿を現わしました。

「ドウルヴァよ。何を望んでいるのか。欲しいものをなんなりと言うがよい」

「主よ」。少年が答えます。「私はこれまで父の王国と領土が欲しいばかりに、きびしい苦行をしてきましたが、今私はあなた様をじっさいに見ています。偉大な聖者や聖人もあなた様を見ることができません。いったい何が私の利益だったのでしょうか？ 私が宮殿を出たのは、ガラスのかけらやごみくずを見つけるのが目的だったことに気づきました。しかし、代わりに見つけたのは、この上なく高価なダイヤモンドです。今私は心から満たされ

ています。もうあなた様になにかを求めるつもりはありません」

このように、貧しくても、または苦しんでいても、ドウルヴァとおなじような決意で神を求めれば、たとえそれが神を見たり神から物を授かったりする目的であっても、やがてほんとうに神を見ることができたら、物質的な物は欲しくなくなります。物質的な財産を求めることの愚かさを悟り、真実を求めて幻想を捨てるのです。ドウルヴァ・マハーラージのようにクリシュナ意識になれば、完全に満たされ、何も欲しくなくなります。

真のギャーニー・賢者は、物質的なものはいつも不安定であることを知っています。また、物質的な利益を得ても、その利益ととおして私たちを混乱させる3つの要素があることを知っています。つまり、働いて儲けたい、資産家になって人に敬われたい、財産を蓄えて有名になりたい、という野心です。そして、それらがどれも体にかかわることであり、体がなくなればいっしょに消えてなくなってしまうことも知っています。裕福な人が死に、体はただの屍となり、その体に入っていた魂はもう裕福でもなんでもなくなり、過去のおこないにふさわしい別の体に入ります。『バガヴァッド・ギーター』は、「賢い人物は物事を正しく知っているから、このことに惑わされない」と言います。そのことを知っている人は、物質的な富を得るという面倒なことは考えないはずで、ギャーニーは「私は至高主クリシュナと永遠な絆を持っている。今こそ、主クリシュナが主の国に私を連れていってくださいようその絆を強くしなくてはならない」と考えます。

宇宙の仕組みには、クリシュナとの絆を再確立してクリシュナの元にもどっていける便宜が用意されています。これが私たちの人生の使命です。必要なものすべて——土地、穀物、くだもの、牛乳、住居、衣服——は、神が供給します。心穏やかに生き、クリシュナ意識を高めさえすればいいのです。これを人生の使命とすべきです。ですから、神が食糧、住居、身の安全、性生活などで私たちに授けてくれるもので満足し、それ以上を求めてはなりません。もっとも素晴らしい文化は、「質素な生活と高尚な思考」という格言で言いあらわされています。工場で食糧や性生活を作りだすことはできません。なんであれ、必要な物は神が授けてくれるものです。それらを活用して神の意識になることが私たちの仕事です。

神は、私たちがクリシュナ意識を修練して最後に主の元にもどることができるように、地上で平和に住める便宜を用意してくれました。しかし現代に生きる私たちは運に見放されています。短命で、食べ物や住む場所がなく、結婚生活も営めず、自然の猛威にさらされて苦しんでいます。これは、今のカリ時代に影響されているからです。ゆえに主チャイタンニャ・マハープラブは、現代の恐ろしい状況を予見し、精神生活を高める絶対的な必要性を強調しました。どう実践すればいいのでしょうか？ チャイタンニャ・マハープラブはその方法を示しています。

ハレール ナーマ ハレール ナーマ
harer nāma harer nāma

ハレール ナーマイヴァ ケーヴァランム

harer nāmaiva kevalam

カラウ ナースティ エーヴァ ナースティ エーヴァ
kalau nāsty eva nāsty eva

ナースティ エーヴァ ガティル アニヤタハー
nāsty eva gatir anyathā

「ただひたすらハレー・クリシュナを唱えなさい」と主は説きました。工場で働いていようと、地獄にいようと、あばら屋に住んでいようと、高層マンションに住んでいようとかわらない。唱えつづけてください、ハレー クリシュナ ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ ハレー ハレー、ハレー ラーマ ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ ハレー ハレーと。お金はいりません、誰も止められません、地位、主義、肌の色も関係ありません——だれでもできます。唱え、そして聞けばいいのです。

どんな形であれ、クリシュナ意識とかかわったのであれば、そして正しい指導者の導きを受けながら実行すれば、間違いなく神の元に帰っていきます。

バフナーナム ジャンマナーナム アンテー
bahūnām janmanām ante

ギャーナヴァーンム マーンム プラパヂャテー
jñānavān mām prapadyate

ヴァースデーヴァハ サルヴァナム イティ
vāsudevaḥ sarvam iti

サ マハートウマー スドウルラバハ
sa mahātmā sudurlabhaḥ

「数多くの誕生と死を繰り返したあと、真の知識を得た人物は、わたしがあらゆる原因の究極原因であることを知り、わたしに身をゆだねる。このような偉大な魂は稀にしか見られない」（『バガヴァッド・ギーター』第7章・第19節）

神の科学に対する哲学的探求は、多くの誕生をとおして実践すべきものです。神を悟ることはたやすいとも言えるし、また同時に難しいとも言えます。クリシュナのことばを真理として受け入れた人にはかんたんですが、高度な知識に頼って探求しようとする人は、数多くの調査を経たあとに自分なりの信念を作らなくてはならず、そのために多くの誕生を繰り返さなくてはなりません。タットウヴァヴィトウ (*tattvavit*) と呼ばれるさまざまな種類の超越主義者がおり、そして絶対真理者（神）を悟っています。超越主義者は絶対真理者を二元性のないものとして捉えます。絶対真理者に二元性はない、つまり絶対真理者が持つ様相をすべておなじレベルで見るのです。このことを正しく理解している人物をタットウヴァヴィトウといいます。

クリシュナは、「絶対真理者には3つの様相、すなわちブラフマン (*Brahman*)・パラマートマー (*Paramātmā*)・バガヴァーン (*Bhagavān*) という理解の仕方がある」と明言しています。ブラフマンは姿や形のないブラフマンの光、パラマートマーは局所的な至高の魂、そしてバガヴァーンは最高人格主神のことです。絶対真理者を3つの角度から見るこ

とで、この考え方が理解できます。山を遠くから見ると、その山の形でしか見られませんが、近づけば木や葉が見えてきます。じっさいに山を登れば、そのなかに植物や動物などさまざまな姿を見ることができます。このように、おなじ対象物であっても角度を変えれば見方も変わるように、聖者は絶対真理者に対してさまざまな概念を当てはめます。もうひとつ、太陽の例があります。太陽の光、太陽本体、太陽神です。太陽の光のなかにいる人を「太陽にいる」とは言えませんし、太陽のなかにいる人は太陽の光のなかにいる人より優れた立場にいます。太陽光線を「遍在するブラフマジョーティの光」として、1カ所に存在する太陽を「局所的な至高の魂」として、また太陽のなかに住む太陽神を「人格主神」として考えることができます。地球上にはさまざまな生物がいますが、ヴェーダ経典を読むと、太陽にもさまざまな生物が住んでいることがわかります。しかしその体は、地球の生物の体が「土」でできているように、「火」でできています。

物質自然界には、土、水、空気、火、空間という5つの濃密な要素があります。宇宙のさまざまな星でもこの5つの1つが主要素になっているため、それぞれの星にも独特の環境があり、各星の主要な要素で構成された体があります。すべての星にまったくおなじ体の生物がいると考えるのはまちがいです。これら5種類の要素が各星で形を変えて存在しているという点から、すべての星には共通性があると言えます。このように、ある星では土が顕著で、別の星では火、また別の星では水、空気、空間などが顕著に見られます。ですから、ある星が土でできていないから、あるいはその環境が私たちの環境とは違っているからそこに生物はいない、と結論することはできません。ヴェーダ経典を読めば、無数の星にさまざまな体を持つ生物が住んでいることがわかります。物質的な条件を満たせば別の物質惑星に入ることができるように、それなりの資格をそなえれば至高主が住む精神的惑星に入ることができます。

ヤーンティ デーヴァ・ヴラター デーヴァーン
yānti deva-vratā devān

ピトゥリーン ヤーンティ ピトゥリ・ヴラターハ
pitṛn yānti pitṛ-vrataḥ

ブフターニ ヤーンティ ブフタージャー
bhūtāni yānti bhūtejyā

ヤーンティ マドゥ・ヤージノー アピ マーンム
yānti mad-yājino 'pi mām

「半神を崇拝する者は半神たちの星に生まれ、祖先を崇拝する者は祖先の元へ行き、わたしを崇拝する者はわたしとともに住む」(『バガヴァッド・ギーター』第9章・第25節)

高い惑星に行こうとする人々は確かにそこへ行けますし、クリシュナの星であるゴーローカ・ヴリンダーヴァンに入りたいと願う人も、クリシュナ意識の方法に従えばそれが実現できます。インドに行こうと思う人は、あらかじめインドのことを調べるはずで、まずその場所について聞くことが最初の経験になります。おなじように、神が住んでいる星

の情報を知りたければ、まず聞かなくてはなりません。すぐに体験してそこへ行くことはできません。ヴェーダ経典には至高の惑星について書かれている説明が数多く用意されています。たとえば『ブラフマ・サムヒター』には次のように述べられています。

チンターマニ ・ブラカラ ・サドゥマス カルパ ・ヴリクシャ・
cintāmaṇi-prakara-sadmasu kalpa-vṛkṣa-

ラクシャーヴリテシュ スラビヒール アビヒパーラヤンタム
lakṣāvr̥teṣu surabhīr abhipālayantam

ラクシュミー・サハスラ・シャタ・サンブラマ・セーヴァマナーナム
lakṣmī-sahasra-śata-sambhrama-sevyamānam

ゴーヴィンダナム アーディ・プルシャンム タマハンム バハジャーミ
govindam ādi-puruṣam tam aham bhajāmi

「私は根源の神・ゴーヴィンダを崇める。ゴーヴィンダは、根源の主、最初の先祖、牛を飼い、あらゆる望みを満たし、精神的な宝石で造られた住居に住み、無数の『望みの木』に囲まれ、無数のラクシュミー（ゴープী）から深い崇敬の念と愛情で奉仕を受けている方である」。このほかにも、特に『ブラフマ・サムヒター』で詳しい説明がなされています。

絶対真理者を悟ろうとする人々は、その捉え方に応じて類別されます。ブラフマンを瞑想する人々、つまり非人格主義論者はブラフマヴァーディー (*brahmavādī*) と呼ばれます。一般的に、絶対真理者を悟ろうとする人々は、最初にブラフマジョーティ (*brahmajyoti*) を理解します。パラマートマー (*Paramātmā*) と呼ばれる局所的な存在である至高の魂に心を集中させる人々は、パラマートマヴァーディー (*paramātmāvādī*) と呼ばれます。至高主は、完全な拡張体として全生物の心のなかに入り、この姿は瞑想や集中によって見られるようになります。主は、すべての生物の心はもちろん、創造世界にあるすべての原子のなかにもいます。パラマートマーの悟りは2番目に得られます。最後の3番目の悟りは、バガヴァーン・最高人格主神です。悟りには3段階あるため、最高絶対真理者は1回の誕生で悟ることはできません。*Bahūnām janmanām ante* (バフナーン ジャンマナーン アンター)。幸運な人ならすぐに究極の悟りに到達できます。しかし、神を悟るにはふつう多くの年月や誕生を経なくてはなりません。

アハンム サルヴァッシャ プラバハヴォー
aham sarvasya prabhavo

マッタ サルヴァナム プラヴァルタター
mattaḥ sarvaṁ pravartate

イティ マトウヴァー バハジャンター マーンム
iti matvā bhajante mām

ブダハー バハーヴァ ・サマンヴィターハ
budhā bhāva-samanvitāḥ

「わたしは、精神界・物質界すべての源である。すべてはわたしから発出された。この事実を完璧に知る賢者はわたしへの献愛奉仕に没頭し、真心こめてわたしを崇拜する」(『バガヴァッド・ギーター』第10章・第8節)

経典『ヴェーダーンタ・スートラ』も、絶対真理者を「すべてを誕生させた源の人物である」と明言しています。クリシュナがすべての源であることを真に納得し、崇拜すれば、すぐに物質界とのかかわりはなくなります。しかしクリシュナを信じず、「いや、私は神がどういうものか自分の目で見たい」と言うのであれば、「この方こそ最高人格主神である」という最終的な悟りを得るまえに、まず非人格的なブラフマンの光輝、次に局所的なパラマートマーの悟りという過程をとおらなくてはなりません。しかしこれには長い歳月が必要です。長年の追究の果てに絶対真理を悟れば、*vāsudevaḥ sarvam iti* (ヴァースデーヴァ サルヴァン イティ)「ヴァースデーヴァがすべてである」という結論に達します。ヴァースデーヴァ (Vāsudeva) はクリシュナの名前のひとつで、「あらゆる場所に住む方」という意味です。ヴァースデーヴァが万物の根源である、*mām prapadyate* (マーン プラパデヤンテー) と悟る人は、主に身をゆだねるようになります。身をゆだねるその境地こそが究極のゴールです。それがすぐにできる人もいるでしょうし、何度も生まれ変わりながら求めた果てに達成する人もいます。どちらにしても、「神は偉大である、そして私は神に従う立場にある」と悟ることで、主に身をゆだねなくてはなりません。

賢い人はこのことを理解し、無数の誕生を待つことなくすぐに服従します。そして、このような情報は、条件づけられた魂のために至高主が深い慈悲心から授けてくれたものと理解します。私たちは誰でも条件づけられた魂であり、物質界の三重の苦しみを味わっています。そんな私たちのために、至高主は、身をゆだねる方法をしめすことで苦しみから救われる機会を授けているのです。

この話を聞いて、「最高人格者が究極のゴールで、主に服従しなくてはならないのであれば、なぜ世界中にこれほど多くの服従の仕方があるのか」と尋ねる人がいるかもしれません。この質問に次の節が答えています。

カーマイス タイス タイル フリタ・ギャーナーハ
kāmais tais tair hr̥ta jñānāḥ

ブラパデヤンテー ニャ ・デーヴァターハ
prapadyante 'nya-devatāḥ

タンム タンム ニヤマム アースタハーヤ
taṁ taṁ niyamam āsthāya

ブラクリテャー ニヤターハ スヴァヤー
prakṛtyā niyatāḥ svayā

「心が物質的な望みによってゆがめられている者たちは半神に服従し、自分の気質に応じて特定の規則や原則に従う」(『バガヴァッド・ギーター』第7章・第20節)

世界にはさまざまなタイプの人間が暮らしており、物質自然の三性質に操られて行動し

ています。一般的に言えることですが、ほとんどの人は解脱を求めてはいません。精神的な物事を求めはしても、その精神的な力でなにかを得ようとします。インドでは、スワミに対して「スワミーजी、私はこういう病気で苦しんでいます。どうか薬を授けてください」と頼むのは珍しいことではありません。医者に診てもらえば高い治療費を要求されますから、奇跡を起こしてくれるスワミになんとかしてもらおうとするのです。またインドでは、スワミが一般家庭を訪ねて、「私に1ルピー渡せば、それを100ルピーにしてみせる」と言ったりします。言われた人は、「5ルピー渡せば500ルピーにしてくれるわけだから、ひとつやらせてみるか」と考えます。こうしてそのスワミは村中の金を集めると、あとは雲隠れ。これが私たちの病気です。相手がスワミであろうと寺院や教会であろうと、求める人の心には物質的な望みしかありません。精神生活をして物質的な利益を求め、体を健康にするためだけにヨーガをやってみる。しかし、ただ健康を守るのにどうしてヨーガにすがろうとするのでしょうか。ふつうの体操や規則的な食事をしていれば健康でいられるはずですが。なぜヨーガに頼るのでしょう。その答は *kāmais tais tair hr̥ta-jñānāḥ* (カーマ イス タイス タイル フリタ・ジャーナーハ) ということばにしめされています。教会に行き、神を「要求に答えてくれる相手」にして、健康な人生を楽しもうとする望み——だれもがそのような傾向を持っているからです。

人々は、物質的な望みを心に抱いてさまざまな半神を崇拝します。物質的な状態から抜け出すことなどは考えません。できるだけ物質界を利用したいと考えているだけです。ヴェーダ経典には多くの助言が用意されています。病気を治したければ太陽を崇拝し、夫が欲しい女性は主シヴァを崇拝し、美しくなりたければこの半神・あの半神を崇拝し、教養を身につけたければサラスヴァティー女神を……などと書かれています。このため、西洋人はヒンドゥー教を多神教だと考えます。しかし、この崇拝の対象は神ではなく、半神です。半神と神は違います。神は一人ですが、私たちとおなじ生物である半神も存在しています。私たちと半神の違いは、半神が強大な力を持っているという点にあります。地球には国王、大統領、独裁者がいます——私たちとおなじ人間です。しかしかれらは並外れた力を持っており、大衆はうまく取りいってその力を利用しようと考え、いろいろな方法でかれらを崇めます。しかし、『バガヴァッド・ギーター』は半神の崇拝を強く戒めています。この節は、人々が自分のカーマ (*kāma*)・物質的な欲望を満たすために半神を崇拝している、と明言しています。

物質生活は欲望だけに支えられています。この世界を楽しみたいと望み、感覚を満たしたいと思っているからこそ物質界が好きなのです。この欲望は、神への愛情がゆがんだ形で現われているものです。魂はもともと神を愛する質に満たされています、しかし神を忘れてしまったために、物質を愛するようになってしまいました。愛情は確かに存在しています。物体を愛そうと、神を愛そうと、愛情であることに変わりありません。いずれにしても、愛そうとする気質を失うことはありません。子どものいない人が猫や犬に愛情を寄せる姿をよく見かけますが、それが証拠です。なぜでしょう？ なにかを愛さずにはいら

れないからです。そして真実を見失っているために、信頼や愛情を犬や猫に寄せるのです。愛する気持ちがなくなることはありませんが、欲望という形でゆがんで現われます。この欲望が満たされないと怒りが起こり、その怒りによって幻想が生じます。幻惑されると運に見放されます。私たちの感情はこのように変化していきますから、この流れをくつがえし、欲望を愛情に変えなくてはなりません。神を愛することができれば、すべてを愛せるようになります。神が愛せなければなにも愛することはできません。愛情だと思っけていても、じつは姿を変えた欲望です。欲望のとりこになった者は正しい判断力をなくしたに等しい、と言われていいます。 *Kāmais tais tair hr̥ta-jñānāḥ* (カーマイス タイス タイル フリタ・ギヤーナーハ)。

半神を崇める規則や原則が経典にたくさん用意されていますが、どうしてヴェーダ経典がそのような崇拝を勧めるのか疑問に思う人がいるかもしれません。必要性があるからです。欲望に駆られた人はなにかを愛そうとしますが、その対象となる半神は至高主の行政官とされています。この考えは、「半神を崇拝するうちにやがてクリシュナ意識を高めていくことができる」という配慮に基づいています。しかし、完全に無神論者になってすべての権威者に反抗する人に、希望はありません。このように考えると、自分よりも高い人物に対する服従心は半神からはじまる、ということが言えます。

けれども、至高主を最初から崇拝すれば半神を拝む必要はないはずです。至高主を崇拝する人は半神にも敬意をしめしているのであり、半神の背後に最高の権威者である最高人格主神がいることや、半神が至高主を崇拝していることも知っていますから、半神を拝む必要はありません。敬う、という心情はどちらもおなじです。主の献愛者はアリにでさえ敬意を払いますから、半神に敬意を払うのはあたりまえです。献愛者はすべての生物が至高主の部分体であり、さまざまな役割を果たしていることを知っているのです。

どんな生物にも至高主との絆がありますから、敬意を払わなくてはなりません。だから献愛者は他の人を「先生、主人」という意味の *prabhu* (プラブ) という名称呼びます。従順さが主の献愛者の特質です。献愛者は親切で忠実で、そしてあらゆる優れた気質をそなえています。結論として、主の献愛者になればすべての優れた気質が自然に沸きおこってくると言えます。生物は本来完璧な存在なのですが、欲望というけがれのために邪悪な性格を持つようになりました。金の一部も金であり、完全に完璧な人物の部分体もやはり完璧である——これは、私たち生命体と神の関係をしめしています。

オーム プールナンム アダハ プールナンム イダンム
om pūrṇam adaḥ pūrṇam idam

プールナートウ プールナンム ウダチャテー
pūrṇāt pūrṇam udacyate

プールナッシャ プールナンム アーダーヤ
pūrṇasya pūrṇam ādāya

プールナンム エーヴァーヴァシッシャテー

pūrṇam evāvaśiṣyate

「人格主神はすべてにおいて完全であり、また完全無欠な方であるため、この物質現象界のように、人格主神から発出されたものはすべて完璧な全体として機能をそなえている。完全全体者である人格主神が作ったものはすべて、それ自体完璧である。人格主神は完全な全体者であるため、人格主神から無数の完璧な単一体が放出されても、人格主神は完璧な調和を保っている。」（『シュリー・イーショーパニシャッド』祈願節）。

生命体は本来完璧ですが、物質にけがされて物質界に転落しました。しかし、クリシュナ意識という方法に従えば、ふたたび完璧な状態にもどれます。クリシュナ意識を修練すれば真に幸福になり、肉体を離れたあとに、永遠な生活と至福、そして完全な知識に満たされた神の国に入ることができるのです。

完